

Interstage Application Server



インストールガイド

Windows(64)

B1WS-0815-01Z0(00)
2009年10月

まえがき

本書の目的

本書は、“Interstage Application Server インストールガイド -Windows(R)-”です。Interstageを運用する前に必要となるソフトウェア条件、資源、インストール方法について説明しています。

本書は、Interstageのサーバパッケージのインストールを行う方を対象に書かれています。

クライアントパッケージのインストールについては、クライアントパッケージに同梱されているインストールガイドを参照してください。

なお、付録Cで、Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただく方法として、ひとつのモデルを説明しています。Interstage管理コンソールによるInterstage運用をご利用いただく場合、最初に参照してください。

前提知識

本書を読む場合、以下の知識が必要です。

- 使用するOSに関する基本的な知識

本書の構成

本書は以下の構成になっています。

第1章 インストール概要

Interstageのインストール概要について説明しています。

第2章 インストール条件

Interstageのインストール条件について説明しています。

第3章 インストール時の注意事項

Interstageのインストール時の注意事項について説明しています。

第4章 インストール作業

Interstageのインストール作業について説明しています。

第5章 特定の機能に関する注意事項

Interstageの機能に関する注意事項を説明しています。

付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール

Fujitsu XMLプロセッサのインストールについて説明しています。

付録B サイレントインストール

サイレントインストールについて説明します。

付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル

Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただく方法として、ひとつのモデルを説明しています。

付録D Java監視機能のインストール

Java監視機能のインストールについて説明しています。

商標

- Microsoft、Active Directory、ActiveX、Excel、Internet Explorer、MS-DOS、MSDN、Visual Basic、Visual C++、Visual Studio、Windows、Windows NT、Windows Server、Win32 は、米国およびその他の国における 米国Microsoft Corporationの商標または登録商標です。
- Sun、Sun Microsystems、Sunロゴ、SolarisおよびすべてのSolarisに関連する商標及びロゴは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc.の商標または登録商標です。
- その他の記載されている商標および登録商標については、一般に各社の商標または登録商標です。

輸出許可

本ドキュメントを非居住者に提供する場合には、経済産業大臣の許可が必要となる場合がありますので、ご注意ください。

著作権

Copyright 2009 FUJITSU LIMITED

2009年10月 第3版
2008年6月 第2版
2007年4月 初版

目 次

第1章 インストール概要.....	1
1.1 サーバタイプ.....	1
1.2 アプリケーションサーバ機能のインストール.....	1
1.2.1 標準インストール.....	1
1.2.2 カスタムインストール.....	2
1.3 管理サーバ機能のインストール.....	3
1.4 機能の追加と削除.....	4
1.5 Interstageのサービス.....	4
第2章 インストール条件.....	6
2.1 動作基本ソフトウェア.....	6
2.2 排他ソフトウェア.....	6
2.3 必要なパッケージ.....	7
2.4 インストール時に必要なディスク容量.....	7
2.5 メモリ容量.....	8
第3章 インストール時の注意事項.....	9
3.1 移行上の注意.....	9
3.2 Systemwalker Centric Managerを導入するとき.....	9
3.2.1 InterstageがインストールされているコンピュータにSystemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールするとき... 10	
3.2.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき... 11	
3.2.3 Interstageを再初期化する.....	13
3.3 Systemwalker/PkiMGR、InfoCA、COMMERCESTAGEがインストールされているときの注意事項.....	14
3.4 Windows Defenderが有効になっているときの注意事項.....	15
3.5 暗号化属性のフォルダにインストールするとき.....	15
第4章 インストール作業.....	16
4.1 インストール前に必須な作業.....	16
4.2 新規インストール.....	18
4.3 機能の追加と削除.....	31
4.3.1 注意事項.....	32
4.3.1.1 セットアップしていた機能をアンインストールする場合.....	32
4.3.1.2 ポート番号の設定に関する注意事項.....	32
4.3.1.3 マルチサーバ管理機能を使用している場合.....	32
4.3.1.4 J2EE機能をアンインストールする場合.....	32
4.3.1.5 セキュア通信サービスをアンインストールする場合.....	32
4.3.1.6 フレームワークをアンインストールする場合.....	32
4.3.1.7 Java EE機能をアンインストールする場合.....	32
4.3.2 インストール作業.....	33
4.4 インストール後の作業.....	34
4.5 インストール時のトラブル対処方法.....	35
第5章 特定の機能に関する注意事項.....	42
5.1 マルチサーバ管理機能.....	42
5.2 Webサーバ (Interstage HTTP Server).....	42
5.3 Fujitsu Enabler.....	43
5.4 JDK/JRE.....	43
5.5 フレームワーク.....	44
付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール.....	45
付録B サイレントインストール.....	46
付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル.....	49

付録D Java監視機能のインストール.....50

 D.1 インストール時に必要な環境.....50

 D.2 Java監視機能のインストール.....50

 D.3 注意事項.....51

第1章 インストール概要

Interstageのインストール概要について説明します。

1.1 サーバタイプ

Interstageのインストール時に指定するサーバタイプについて説明します。
サーバタイプには以下の2種類があります。

- ・ アプリケーションサーバ機能をインストール
Interstageのサーバ機能をインストールする場合に選択します。
また管理対象サーバとしてインストールする場合も本項目を選択します。
- ・ 管理サーバ機能をインストール
Interstageの管理サーバ機能をインストールする場合に選択します。
また複数のサーバを管理し、操作を行う場合も本項目を選択します。

管理対象サーバや管理サーバ機能については、“運用ガイド(基本編)”の“マルチサーバ管理機能”を参照してください。

1.2 アプリケーションサーバ機能のインストール

アプリケーションサーバ機能をインストールする場合、インストールタイプを選択することができます。
インストールタイプには、以下の2種類があります。

- ・ [標準インストール](#)
Interstageの標準的な機能を使用し、簡易にインストールを行いたい場合に選択します。
- ・ [カスタムインストール](#)
使用する機能を最小セットでインストールする場合に選択します。

Interstageを利用するために必要な環境設定は、Interstageのインストール時に自動的にセットアップされます。
インストールが終了した後は、Interstage管理コンソールによって、簡易な操作で運用が行えます。

なお標準またはカスタムインストールでインストールした機能の選択状態の変更は“[1.4 機能の追加と削除](#)”で行います。



ポイント

Interstageインストール時のセットアップでは、システム規模がlargeで設定されます。システム規模の変更を行う場合は、“運用ガイド(基本編)”を参照して変更してください。

1.2.1 標準インストール

標準インストールで利用できる機能は以下のとおりです。

機能	説明
Interstage Application Serverの基本機能	Interstage Application Serverに必要な基本機能
J2EE	Servletサービス/Interstage EJBサービス
	Interstage JMSサービス
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	Apache2.0ベースのWebサーバであるInterstage HTTP Server
Interstage管理コンソール	Interstage管理コンソール
セキュア通信サービス	証明書・鍵管理機能、およびSSL通信機能
データベース連携サービス	データベース連携サービス

機能	説明
非同期通信	イベントサービス
オプション機能	Portable-ORB
	CORBAサービスディベロップメントツール
	Enabler Server
Interstage ディレクトリサービス	Interstageの各サービスから使用できる、LDAPをベースとしたディレクトリサービス機能
サンプルアプリケーション	Interstageのサンプル
JDK 5.0	JDKバージョン5.0
フレームワーク	フレームワーク

注) 64ビットのInterstage Application Server Enterprise Editionでは、上記に示す機能の基盤として動作するために以下の機能が暗黙的にインストールされます。

- CORBAサービス(IIOP通信基盤)
- コンポーネントランザクションサービス(アプリケーション運用管理基盤)
- Interstage JMXサービス

※) CORBAサービスおよびコンポーネントランザクションサービスはEJBおよびServletを利用する場合に必要な基盤機能です。Interstageを起動すると、これらのサービスは起動します。

注) Servletサービスのインストール後に、IJSERVERワークユニットが作成されます。

注) Fujitsu XMLプロセッサについては、本ソフトウェアからはインストールされません。使用する場合は、“[付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール](#)”を参照してください。

1.2.2 カスタムインストール

カスタムインストールは以下の場合に使用します。

- 使用する機能を最小セットでインストールする場合
- JRE 5.0または異なるバージョンのJDK/JREをインストールする場合

カスタムインストールで選択可能な機能は以下のとおりです。

機能		説明	インストール時のデフォルト状態でのインストール有無
Interstage Application Serverの基本機能		Interstage Application Serverに必要な基本機能	必須機能のため、必ずインストールされます。
J2EE	Servletサービス/ Interstage EJBサービス	Tomcat5.5ベースのServletサービスとInterstage EJBサービスです。 注) Interstage Webサービスを利用する場合は、本機能をインストールしてください。	インストール Servletサービスのインストール後に、IJSERVERワークユニットが作成されます。
	Interstage JMS	分散オブジェクト環境におけるJ2EE準拠の非同期通信機能です。	インストール
Java EE		GlassFish v2.1ベースのJava EE機能です。	インストールせず
Webサーバ(Interstage HTTP Server)		Apache2.0ベースのWebサーバであるInterstage HTTP Serverです。	インストール
Interstage管理コンソール		GUIによるInterstageの環境構築/運用操作/運用監視を提供する機能です。	インストール

機能		説明	インストール時のデフォルト状態でのインストール有無
セキュア通信サービス		セキュア通信サービス機能	インストール
データベース連携サービス		データベース連携サービス	インストール
非同期通信	イベントサービス	アプリケーションプログラム間の通信をオブジェクトで非同期に行う機能です。	インストール
	MessageQueueDirector	メッセージキューを基盤とした非同期通信機能です。	インストールせず
オプション機能	Portable-ORB	Javaクライアントの実行時にWebサーバからJavaランタイムをダウンロードして実行環境を構築するサービスです。	インストール
	CORBAサービスディベロップメントツール	CORBAアプリケーション開発用のツールです。	インストール
	Enabler Server	Interstageディレクトリサービスを使用する場合に選択します。	インストール
シングル・サインオン		Interstageシングル・サインオン(業務サーバ)	インストールせず
		Interstageシングル・サインオン(認証サーバ)	インストールせず
		Interstageシングル・サインオン(リポジトリサーバ)	インストールせず
Interstage ディレクトリサービス		Interstageの各サービスから、LDAPをベースとしたディレクトリサービス機能を使用する場合に選択します。	インストール
サンプルアプリケーション		Interstageのサンプル	インストール
JDK/JRE	5.0	JDKまたはJREのバージョン5.0	インストール
	6	JDKまたはJREのバージョン6	インストールせず
フレームワーク		フレームワーク	インストール

注) Fujitsu XMLプロセッサについては、本ソフトウェアからはインストールされません。使用する場合は、“[付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール](#)”を参照してください。

1.3 管理サーバ機能のインストール

サーバタイプとして「管理サーバ機能をインストール」を選択した場合、以下の機能がインストールされます。

機能	説明
Interstage Application Serverの基本機能	Interstage Application Serverに必要な基本機能
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	Apacheベース2.0のWebサーバであるInterstage HTTP Server
Interstage管理コンソール	GUIによるInterstageの環境構築/運用操作/運用監視を提供する機能
セキュア通信サービス	証明書・鍵管理機能、およびSSL通信機能
オプション機能	Enabler Server
Interstage ディレクトリサービス	Interstageの各サービスから使用できる、LDAPをベースとしたディレクトリサービス機能

機能	説明
JDK 5.0	JDKバージョン5.0

注) 管理サーバ機能では、上記に示す機能の基盤として動作するために以下の機能が暗黙的にインストールされます。

- Interstage JMXサービス
- Interstage管理コンソール用Servletサービス

1.4 機能の追加と削除

“機能の追加と削除”は、現在インストールされている機能に対して機能の追加、または削除を行う（インストール機能の選択状態の変更）機能です。

なおマルチサーバ管理機能を使用している場合、管理サーバおよび管理対象サーバに対してインストール機能の選択状態は変更できません。管理対象サーバに対してインストール機能の選択状態を変更する場合は、サイトから削除した後に行ってください。



- インストール機能の選択状態を変更する前に、Interstageの資源のバックアップを採取しておくことをお勧めします。バックアップについては、“運用ガイド(基本編)”を参照してください。
- 資源の移行方法については“移行ガイド”を参照してください。

1.5 Interstageのサービス

Interstageをインストールすると登録されるサービスの役割について説明します。

サービス名	説明
INTERSTAGE	Interstageの運用管理機能を提供するサービスです。
INTERSTAGE API	MSCSを利用してクラスタシステムを使用する場合に、Interstageの運用管理機能を提供するサービスです。 (注1)
OD_start	分散オブジェクト環境においてプラットフォームに依存しないアプリケーション間の相互連携を実現するサービスです。
InterfaceRep_Cache Service	オブジェクトのインタフェース情報を一括して管理する、インタフェースリポジトリサービスです。アプリケーションの連携時に、動的なインタフェース情報を提供します。Interstageを運用するために必要なサービスです。
InterfaceRep_Cache_e Service	オブジェクトのインタフェース情報を一括して管理する、EJBサービス用のインタフェースリポジトリサービスです。EJBアプリケーションを配備する場合に必要なサービスです。
Naming Service	オブジェクトリファレンスを論理的な名前と関連付けて管理する、ネーミングサービスです。
EventFactory (注2)	イベントサービスにおいて、動的にイベントチャネルを生成するために必要なサービスです。Interstage JMSでQueueRequestor、TemporaryQueue、TemporaryTopic、またはTopicRequestorを使用する場合に必要なサービスです。
EventService (注2)	分散アプリケーション間の通信を非同期に行う機能を提供するサービスです。Interstage JMSを使用する場合に必要なサービスです。
FJapache	Interstage HTTP Server(Apache 2.0.59をベースとしたWebサーバ)のサービスです。Webサーバを使用する場合に必要なサービスです。
Interstage Directory Service (注3)	Interstage ディレクトリサービス(LDAPをベースとしたディレクトリサービス)のサービスです。

サービス名	説明
Interstage JServlet(OperationManagement)	Interstage管理コンソール用のServletサービスです。Interstage管理コンソールを使用するには本サービスが動作している必要があります。
Interstage Operation Tool	Interstage管理コンソールの実行環境を提供するサービスです。本サービスを起動することで以下のサービスが連動して起動されます。 ・Interstage JServlet(OperationManagement) ・Interstage Operation Tool(FJapache)
Interstage Operation Tool(FJapache)	Interstage管理コンソールが使用するInterstage HTTP Serverを提供するサービスです。
ObjectTransactionService	グローバルトランザクションを提供するサービスです。OTSおよびJTSを使用する場合に必要です。
TransactionDirector	アプリケーションの実行環境を提供するサービスです。IJSERVERを使用する場合に必要なサービスです。
Fujitsu Enabler	Interstageのリポジトリ機能を提供するサービスです。Interstage ディレクトリサービスを使用する場合に必要なサービスです。
Interstage Server Monitor Service	InterstageのWebサーバコネクタ用のサーバ故障監視サービスを提供します。
Interstage Server Monitor Service(Cache Manager)	InterstageのWebサーバコネクタ用のサーバ故障監視サービスを提供します。(キャッシュ管理)
Interstage Java EE DAS	Java EE機能の運用管理を行うサービスです。Interstage Java EE 管理コンソール、asadminコマンドからの運用操作依頼を受け付けます。
Interstage Java EE Node Agent	Java EE機能のサーバーインスタンスの管理を行うサービスです。サーバーインスタンスの起動・停止、監視を行います。
Message Queue 4.1 Broker (注4)	Java EEで規定されているJMSの非同期通信環境を提供するサービスです。

注1) MSCSとはMicrosoft Corporationのクラスタシステムとして使用されているMicrosoft(R) Cluster Serverのことです。

注2) 本サービスは、以下の操作を行うとサービスとして登録されます。

- ・ Interstage管理コンソールを使用し、Interstage構成サービスとしてイベントサービスを登録する
- ・ isinit/essetupコマンドを使用し、イベントサービスのセットアップを行う

注3) 本サービスは、以下の操作を行うとサービスとして登録されます。

- ・ Interstage管理コンソールを使用し、リポジトリを作成する

注4) 本サービスはimqsvcadmコマンドを使用した場合に、サービスとして登録されます。

第2章 インストール条件

Interstageのインストール条件について説明します。

2.1 動作基本ソフトウェア

本ソフトウェアを使用する場合、次の基本ソフトウェアが必要です。

項番	基本ソフトウェア名	備考
1	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Standard x64 Edition	
2	Microsoft(R) Windows Server® 2003, Enterprise x64 Edition	
3	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Standard x64 Edition	
4	Microsoft(R) Windows Server® 2003 R2, Enterprise x64 Edition	
5	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Standard (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
6	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Enterprise (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
7	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Datacenter (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
8	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Standard without Hyper-V (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
9	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Enterprise without Hyper-V (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
10	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Datacenter without Hyper-V (x64版のみ) ※	Server Core インストールでのInterstageの運用はサポートしていません。
11	Microsoft(R) Windows Server® 2008 Foundation	

※「Microsoft(R) Windows Server® 2008」については、x64版のみInterstageの運用をサポートしています。



注意

アプリケーション開発時およびアプリケーション実行時に必要なソフトウェアについては、“使用上の注意”の“ソフトウェア条件”を参照してください。

2.2 排他ソフトウェア

本ソフトウェアを使用する場合、以下の製品を同一オペレーティング・システムにインストールしないでください。

■Interstage

項番	製品名	バージョン・レベル	備考
1	Interstage Application Server	8.0.0以降 (注)	バージョン・レベルやエディションに関わらず、同一オペレーティング・システムに複数インストールすることはできません。
2	Interstage Web Server	V9.0.0以降 (注)	
3	Interstage Business Application Server	8.0.0以降 (注)	
4	Interstage Application Development Cycle Manager	V10.0.0以降 (注)	
5	Interstage Application Framework Suite	V7.0L11以降 (注)	
6	Interstage Apworks	8.0.0以降 (注)	
7	Interstage List Works	V9.0.1以降 (注)	
8	Interstage Service Integrator	V9.0.0以降 (注)	
9	Interstage Studio	V9.0.0以降 (注)	

(注) 64bit版Windowsにおいて、32bitモードでの動作をサポートする各製品についても同一システムにインストールすることはできません。

■Systemwalker

項番	製品名	バージョン・レベル
1	SystemWalker/CentricMGR (運用管理クライアント)	V5.0以降 (注)
2	Systemwalker CentricMGR (運用管理クライアント)	V10.0以降 (注)
3	Systemwalker Centric Manager (運用管理クライアント)	V11.0以降 (注)
4	Systemwalker Availability View	V13.3.0以降 (注)
5	Systemwalker Desktop Inspection	V13.0.0以降 (注)
6	Systemwalker IT Process Master	V13.3.0以降 (注)

(注) 64bit版Windowsにおいて、32bitモードでの動作をサポートする各製品についても同一システムにインストールすることはできません。

2.3 必要なパッケージ

本製品を使用する場合、以下のパッケージの適用が必要です。

項番	修正プログラム	備考
1	Microsoft Visual C++ 2005 SP1 再頒布可能パッケージ (x64)	左記パッケージは、本製品インストール時にインストールされます。 なお、Windows Installer 3.0以上のソフトウェアがインストールされている必要があります。

2.4 インストール時に必要なディスク容量

インストール時に必要なディスク容量は次のとおりです。

項番	機能	ディスク容量(単位Mバイト)
1	Interstageのインストールフォルダ	1280
2	システムドライブ	100
合計		1380



- ・ 上記以外に、作業域として、環境変数TEMPに指定したフォルダに50Mバイト程度、Interstageのインストールフォルダに220Mバイト程度のディスク容量が必要です。
- ・ “4.2 新規インストール”、および“4.3 機能の追加と削除”で表示される画面で、インストールに必要なディスク容量が1Mバイト異なって表示される場合がありますが、本ソフトウェアのインストールには問題ありません。
- ・ JDK/JRE 5.0、JDK/JRE 6をInterstageのインストールフォルダとは別ドライブにインストールする場合、それぞれ以下のディスク容量が必要になります。

JDK 5.0 : 235MB

JRE 5.0 : 116MB

JDK 6 : 275MB

JRE 6 : 135MB

2.5 メモリ容量

本ソフトウェアを動作させるために必要なメモリ容量については、“チューニングガイド”の“必要資源”－“メモリ容量”を参照してください。

第3章 インストール時の注意事項

本ソフトウェアをインストールする際の注意事項について説明します。

3.1 移行上の注意

以前のバージョンから本ソフトウェアに移行する場合の注意事項については、オンラインマニュアルの“移行ガイド”を参照してください。

なおフレームワークの移行に関する注意事項については、オンラインマニュアルの“Apcoordinatorユーザーズガイド”を参照してください。

3.2 Systemwalker Centric Managerを導入するとき

Interstageに含まれているCORBA サービス(ObjectDirector)は、Systemwalker Centric Manager (SystemWalker/CentricMGR、Systemwalker CentricMGRおよびSystemwalker Centric ManagerをSystemwalker Centric Managerと表記して説明します。なおVLを表記している場合は当該製品名を記載します)にも含まれているため、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバとInterstageを同一コンピュータに導入する場合には注意が必要です。

ここでは、以下の作業について説明します。

- ・ インストールについて
- ・ Interstageの再初期化について

Systemwalker Centric Managerの環境設定やコマンド等の詳細については、Systemwalker Centric Managerのマニュアルを参照してください。

なお本注意事項は、Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバのみが対象であり、Systemwalker Centric Manager エージェントの導入に関しては対象外です。

InterstageとSystemwalkerを同一システムにインストールする場合は同じオペレーティング・システムの製品でのみ使用可能です。

■“運用環境保守ウィザード”について

“運用環境保守ウィザード”は、以下の[スタート]メニューからアプリケーションを起動してください。

- ・ V11.0L10以降の場合
[スタート] > [プログラム] > [Systemwalker Centric Manager] > [ツール] > [運用環境の保守]
- ・ V10.0L2xの場合
[スタート] > [プログラム] > [Systemwalker CentricMGR] > [環境設定] > [運用環境保守ウィザード]

■Systemwalker Centric Managerのパッチについて

Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバとInterstageを同一コンピュータに導入する場合、以下のSystemwalker Centric Managerのパッチを適用する必要があります。

Systemwalker Centric Manager 運用管理サーバをインストール後、Systemwalker Centric Managerの環境の作成または復元を行う間までに適用してください。

- ・ SystemWalker/CentricMGR V10.0L10を使用する場合は、修正番号TP06255を適用してください。
- ・ Systemwalker CentricMGR V10.0L20を使用する場合は、修正番号TP06254を適用してください。
- ・ Systemwalker CentricMGR V10.0L21を使用する場合は、修正番号TP06210を適用してください。
- ・ SystemWalker/CentricMGR V5.0Lxxについては未定です。



注意

マルチサーバ管理機能を使用している場合は、以下のサーバ種別を推奨します。

- ・ 管理サーバ
- ・ スタンドアロンサーバ

ここでは、アプリケーションサーバ機能のインストールの場合について記載しています。管理サーバ機能のインストールの場合はそのままインストールすることができます。

3.2.1 InterstageがインストールされているコンピュータにSystemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールするとき

以下の手順で、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールします。

なおInterstageが管理サーバの場合は、Systemwalkerのマニュアルを参照してインストールしてください。

1.Interstageの停止とSystemwalker Centric Managerのインストール

1. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。
C:¥> isstop -f
2. Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバをインストールします。
注) SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V10.0L10の場合、インストール直後およびコンピュータの再起動直後に環境作成実行確認画面が表示されますが、環境作成を行わないでください。
3. コンピュータを再起動します。
4. 再度、1.を実行し、Interstageを停止します。

2.Systemwalker Centric Managerの環境作成と起動



注意

ネーミングサービス環境をローカルシステム上に作成している場合は、すでにObjectDirector環境が構築されているため、ObjectDirector環境の再構築を行わないでください。詳細は、Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降で提供されている“Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfoware,ObjectDirectorとの共存ガイド”を参照してください。

■Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

1. “運用環境保守ウィザード”を起動します。
2. “運用環境の構築”を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境を作成します。
3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥scentricmgr

■SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V10.0L10の場合

1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を設定します。
2. 以下のセットアップコマンド(-mixオプション指定)を実行します。
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥MpFwbs¥bin¥MpFwSetup -mix
初期画面で“Systemwalker Centric Manager 環境作成”ボタンをクリックし、環境を作成します。
3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
ー Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥scentricmgr

- ー Systemwalker CentricMGR V5.0L20～V10.L10の場合
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\bin\scentricmgr

4. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を削除します。

3.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。
C:\> isstart

3.2.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき

以下の手順で、Interstageをインストールします。

なおInterstageが管理サーバの場合は、Systemwalkerのマニュアルを参照してインストールしてください。

1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除

■Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

1. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\bin\pcentricmgr
2. “運用環境保守ウィザード”を起動します。
3. “運用環境の退避”を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境をバックアップします。
4. “運用環境の削除”を選択し、Systemwalker Centric Managerの環境を削除します。

■SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V10.0L10の場合

1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を設定します。
2. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
 - ー Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\mpcmtool\service\bin\pcentricmgr
 - ー Systemwalker CentricMGR V5.0L20～V10.L10の場合
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\bin\pcentricmgr
3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerの環境をバックアップします。
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\mpcmtool\backup\bin\mpbk バックアップデータ格納先フォルダ
4. 再度、2.を実行し、Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
5. 以下のセットアップコマンドを実行します。
C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\MpFwbs\bin\MpFwSetup
初期画面で“Systemwalker Centric Manager環境削除”ボタンをクリックし、環境を削除します。
6. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を削除します。

2.ObjectDirectorのアンインストール

1. Systemwalker Centric ManagerでインストールされたObjectDirectorをアンインストールします。
[コントロールパネル]>[管理ツール]>[サービス]で“OD_start”サービスを停止します。
[コントロールパネル]>[アプリケーションの追加と削除]で“ObjectDirector Server”をアンインストールします。
2. コンピュータを再起動します。
3. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を設定します。
4. Systemwalker Centric Managerのすべての機能を停止します。
 - － Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥mpcmtool¥service¥bin¥pcentricmgr
 - － 上記以外の場合
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥pcentricmgr
5. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を削除します。

3.Interstageのインストールと停止

1. Interstageをインストールします。
2. コンピュータを再起動します。
3. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。
C:¥> isstop -f

4.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動



注意

ネーミングサービス環境をローカルシステム上に作成している場合は、すでにObjectDirector環境が構築されているため、ObjectDirector環境の再構築を行わないでください。詳細は、Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降で提供されている“Systemwalker Centric Manager Interstage,Symfaware,ObjectDirectorとの共存ガイド”を参照してください。

■Systemwalker CentricMGR V10.0L20以降および、Systemwalker Centric Manager V11.0L10以降の場合

1. “運用環境保守ウィザード”を起動します。
2. Systemwalker Centric Managerの環境を作成または復元します。
 - － Systemwalker Centric Managerの環境を作成する場合は、“運用環境の構築”を選択します。
 - － Systemwalker Centric Managerの環境を復元する場合は、“運用環境の復元”を選択します。
3. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。
C:¥> [Systemwalkerインストールパス]¥MPWALKER.DM¥bin¥scentricmgr

■SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V10.0L10の場合

1. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を設定します。

2. 以下のセットアップコマンド(-mixオプション指定)を実行します。

C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\MpFwbs\bin\MpFwSetup -mix
初期画面で“Systemwalker Centric Manager 環境作成”ボタンをクリックし、環境を作成します。

3. 以下のコマンドを実行し、復元の準備をします。

C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\mpfwbs\bin\premprs バックアップデータ格納フォルダ

4. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerの環境をリストアします。リストア作業の詳細は、Systemwalker Centric Managerのマニュアルを参照してください。

C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\mpcmtool\backup\bin\mprsc バックアップデータ格納フォルダ

5. 以下のコマンドを実行し、Systemwalker Centric Managerのサービスを起動します。

- ー Systemwalker CentricMGR V5.0L10の場合

C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\mpcmtool\service\bin\scentricmgr

- ー Systemwalker CentricMGR V5.0L20～V10.0L10の場合

C:\> [Systemwalkerインストールパス]\MPWALKER.DM\bin\scentricmgr

6. SystemWalker/CentricMGR V5.0L10～V5.0L20の場合、システム環境変数“INS_NAME=no”を削除します。

5.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。

C:\> isstart

3.2.3 Interstageを再初期化する

以下の場合、Interstageを再初期化する必要があります。なお対象となるInterstageはアプリケーションサーバ機能です。

- ・ InterstageとSystemwalker Centric Managerの運用管理サーバを同一サーバ上にセットアップしている

1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除

“3.2.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき”の“1.Systemwalker Centric Managerの停止と環境削除”を参照して、Systemwalker Centric Managerを停止し、環境を削除します。

2.Interstageの再初期化と停止

1. Interstageを再初期化します。

2. -fオプション(強制停止)を指定したisstopコマンド、もしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを停止します。

C:\> isstop -f

3.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動

“3.2.2 Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバがインストールされているコンピュータにInterstageをインストールするとき”の“4.Systemwalker Centric Managerの環境復元と起動”を参照して、Systemwalker Centric Managerの環境を復元し、起動します。

4.Interstageの起動

1. isstartコマンドもしくはInterstage管理コンソールを使用してInterstageを起動します。

C:\> isstart

3.3 Systemwalker/PkiMGR、InfoCA、COMMERCESTAGEがインストールされているときの注意事項

Interstageのサーバ機能をインストールすると、アプリケーションサーバの基本機能として、コンポーネントトランザクションサービスがインストールされます。コンポーネントトランザクションサービスには、サービスを構成する機能の一つとしてEXTPが含まれています。EXTPは以下の製品からも使用されるため、以下の製品とInterstageを同一コンピュータ上で運用する場合は注意が必要です。

- COMMERCESTAGE
- InfoCA
- Systemwalker/PkiMGR

上記製品とInterstageを同一コンピュータ上で運用する場合、以下の手順でインストールしてください。

1. EXTPを使用する他製品のインストール
Interstageをインストールする前に、上記のEXTPを使用する他製品をインストールしてください。インストール方法については、各製品のソフトウェア説明書を参照してください。
2. 製品ごとの環境削除および環境再構築の実施
“[■EXTPの移行方法](#)”を参照して、EXTP環境を移行してください。

■EXTPの移行方法

EXTP環境(EXTPの実行環境)は、以下の手順で移行します。

1. EXTPを使用する各製品の停止
EXTPを使用している各製品を停止してください。停止方法については各製品のマニュアルを参照してください。
2. 各製品の環境の削除
既存環境が存在する場合には、`csunsetup`コマンドを実行し、業務システムをアンセットアップしてください。
例:業務システムのアンセットアップ
`C:¥>csunsetup`
3. EXTPパッケージのアンインストール
EXTPパッケージをアンインストールしてください。アンインストール方法については、各製品のマニュアルを参照してください。
4. EXTPインストール環境の削除
下記フォルダおよびフォルダ配下のファイルを削除してください。
 - 2.でアンセットアップした環境のフォルダおよびフォルダ配下に残っているファイル
 - 3.でアンインストールしたEXTPインストール先フォルダ配下に残っているファイル

注) ユーザ作成資源が、EXTPインストール先フォルダまたはセットアップ先フォルダ配下に作成されている場合は、その資源をバックアップしてから実施してください。
5. Interstageのインストール
Interstageをインストールしてください。
6. 各製品の環境の再作成
製品ごとに、以下の手順で環境を再作成します。
 1. 環境の作成
`cssetup`コマンドを実行し、EXTP環境をセットアップしてください。
例:EXTP環境をd:\extp¥etcフォルダに対してセットアップする場合
`C:¥>cssetup d:\extp¥etc`

2. 各種定義の登録

extpdefutyコマンドを実行し、旧環境へ定義していた通信環境定義、ワークユニット定義を登録してください。

例:通信環境定義が記述されたファイルOTMECCWB.txtの内容を登録する場合のextpdefutyコマンド実行例

C:¥>extpdefuty OTMECCWB

3.4 Windows Defenderが有効になっているときの注意事項

Windows Defenderが有効になっている場合、Interstageのサーバ機能をインストールすると、Windows Defenderの履歴およびイベントビューアのシステムログに、以下のWindows Defenderからのメッセージが出力されることがあります。

これは、Windows Defenderのリアルタイム保護エージェントがサービスのソフトウェアの登録を監視しているため、そのまま使用して問題ありません。

また、インストール中、Windows Defenderのアイコンがタスクバーの通知領域に表示されることがあります。この場合、Windows Defenderを開き、“コンピュータの設定に対する変更を確認する”の画面で、[操作を適用する]をクリックしてください。

■Windows Defenderの履歴のメッセージ

日本語

このプログラムは、望ましくない動作をする可能性があります。

英語

This program has potentially unwanted behavior.

■イベントビューアのシステムログ

日本語

Windows Defender リアルタイム保護エージェントで、変更が検出されました。これらの変更を行ったソフトウェアに潜在的リスクがないか分析することをお勧めします。これらのプログラムの動作方法に関する情報を使用して、これらのプログラムの実行を許可するか、コンピュータから削除するかを選択できます。プログラムまたはソフトウェア発行者を信頼できる場合のみ、変更を許可してください。Windows Defender は許可された変更を元に戻せません。

英語

Windows Defender Real-Time Protection agent has detected changes. Microsoft recommends you analyze the software that made these changes for potential risks. You can use information about how these programs operate to choose whether to allow them to run or remove them from your computer. Allow changes only if you trust the program or the software publisher. Windows Defender can't undo changes that you allow.

3.5 暗号化属性のフォルダにインストールするとき

暗号化属性が設定されたフォルダにInterstageのサーバパッケージをインストールするとInterstageのサービスは起動できなくなります。

暗号化属性が設定されていないフォルダにインストールするか、暗号化属性を解除してください。

第4章 インストール作業

Interstageのインストール作業について説明します。

4.1 インストール前に必須な作業

本ソフトウェアをインストールする前に、必ず、以下の作業を行ってください。

1. インストールの可否の確認

- “第2章 インストール条件”を参照して、インストール可能な状態であるか確認してください。
- Interstageのクライアント機能がインストールされている場合、Interstageのサーバ機能はインストールできません。

2. アプリケーションの停止

- Windows(R)上のすべてのアプリケーションを停止させてください。
Interstageをインストールする際に、Interstageが利用するディスク、レジストリなどの資源を使用しているとインストール作業に失敗する場合があります(例: イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタなど)。
- Interstageがインストールされており、Interstageのサービスが起動している場合は停止してください。

3. 環境の確認

- 本ソフトウェアはシステム環境変数のPATH、CLASSPATHに以下のパスを追加します。不必要なパスを設定している場合は削除してください。システム環境変数PATH、CLASSPATHの有効長を超える場合、パスは設定されません。“C:¥Interstage”にInterstageをインストールした場合について説明します。

[PATH]

```
C:¥Interstage¥JDK5¥bin
C:¥Interstage¥JRE5¥bin
C:¥Interstage¥JDK14¥bin
C:¥Interstage¥JRE14¥bin
C:¥Interstage¥bin
C:¥Interstage¥ODWIN¥bin
```

[CLASSPATH]

```
C:¥Interstage¥ODWIN¥etc¥class¥OD.java4.jar
C:¥Interstage¥eswin¥lib¥esnotify.java4.jar
C:¥Interstage¥lib¥isadmin_scs.jar
C:¥Interstage¥jms¥lib¥fjmsprovider.jar
C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥isj2ee.jar
C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥providerutil.jar
C:¥Interstage¥J2EE¥lib¥fscontext.jar
C:¥Interstage¥F3FMuddic¥lib¥fjuddi4j.jar
C:¥Interstage¥F3FMuddic¥lib¥isplugin.jar
.
C:¥Interstage¥lib
```

- Interstageのインストール時に必要なディスク容量については、“2.4 インストール時に必要なディスク容量”を参照してください。
- Interstageをインストールするシステムにおいて、アプリケーションを含むすべてのサービスでポート番号が重複する可能性がないかを以下の手順で確認してください。システム上のすべてのサービスにおいて、それぞれ異なるポート番号を設定する必要があります。
 - システム上のサービスが使用しているポート番号を確認します。ポート番号の確認方法については、それぞれのサービスのマニュアルを参照してください。
 - Interstageのサービスが使用するポート番号を確認します。Interstageのサービスが使用するポート番号については、“運用ガイド(基本編)”の“ログ情報、ポート番号”―“ポート番号”を参照してください。

3. 1.と2.のポート番号が重複していないかを確認します。

ポート番号が重複している場合は、以下のいずれかの方法で対処してください。

- Interstageのインストール前に、ポート番号が重複する可能性のあるシステム上のサービスを停止させます。
- Interstageのインストール時の“**ポート番号の設定**”画面で、Interstageのサービスが使用するポート番号を未使用のポート番号に変更します。
注) 本画面では、すべてのサービスのポート番号を変更することはできません。
- Interstageのインストール後に、それぞれのポート番号の設定箇所、ポート番号を未使用のポート番号に変更します。Interstageのサービスが使用するポート番号の設定箇所については、“運用ガイド(基本編)”の“ログ情報、ポート番号” – “ポート番号”を参照してください。



Interstageをインストールするシステムにおいて、WebサーバとしてMicrosoft(R) Internet Information Servicesを使用している場合は、Webサーバ(Interstage HTTP Server)の初期値のポート番号がMicrosoft(R) Internet Information Servicesの初期値のポート番号と同じ値(80)で設定されるため、注意してください。

Interstageのインストール時の“**ポート番号の設定**”画面でポート番号を変更しないでインストールを続行させた場合は、インストール後のサービス“FJapache”の起動処理でエラーが発生します。インストール前にMicrosoft(R) Internet Information Servicesを停止させるか、Webサーバを共存させる場合は、どちらかのポート番号を未使用のポート番号(80以外)に変更して運用してください。

4.必要なソフトウェアのインストール

以下のソフトウェアがインストールされていない場合は、インストールしてください。

- Microsoft(R) Internet Explorer
- インターネットプロトコル(TCP/IP)



Interstageでは、IPv6/IPv4デュアルスタックのみをサポートしています。IPv6環境での運用を行う場合でも、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)がインストールされてかつ、有効である必要があります。なお、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)がインストールされていない環境でInterstageのインストールを実行した場合、各種ポート番号の設定時に有効なポート番号を設定しても使用中である旨のメッセージが表示されます。この場合、IPv4のインターネットプロトコル(TCP/IP)をインストールしてから、Interstageのインストールを実行してください。

5.ターミナルサービスのモード変更

以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更してください。

CHANGE USER /INSTALL



- ターミナルサービスが実行モードでインストールを行うと、インストールがハングアップしてインストールに失敗する場合があります。
- ターミナルサービスが実行モードでインストールを行うと、“■ターミナルサービスが実行モードの場合”に示すメッセージが出力される場合があります。
- インストール中にターミナルサービスをインストールモード、または実行モードに変更した場合、ターミナルサービスのモードが変更されたことを示すメッセージが表示されてインストールに失敗します。

上記のような状態になった場合、“■ターミナルサービスが実行モードの場合”または“■セットアップステータスでハングアップした場合”に示す対処を行ってください。

4.2 新規インストール

本ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

なおここで説明する手順は、コンピュータの管理者、またはAdministratorsグループのメンバーで行ってください。

1. インストールの開始

インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、表示される以下の画面で[インストール]をクリックしてください。



2. タイプの選択

“サーバタイプの選択”画面で、[アプリケーションサーバ機能をインストール]、または[管理サーバ機能をインストール]を選択し、[次へ]をクリックしてください。



[管理サーバ機能をインストール]を選択した場合は、“[3.インストールの確認](#)”画面に移ります。

“インストールタイプの選択”画面で、[標準インストール]または[カスタムインストール]を選択し、[次へ]をクリックしてください。



注意

[アプリケーションサーバ機能をインストール]の[標準インストール]、[管理サーバ機能をインストール]を選択した場合、Interstageで使用する予定のポート番号がすでに使用された状態であるとき、警告メッセージが表示されます。“[3.インストールの確認](#)”画面で、[変更する]を選択してポート番号を変更してください。

[アプリケーションサーバ機能をインストール]の[カスタムインストール]を選択した場合は、“[4.Interstageのインストール先の設定](#)”画面に移ります。

3. インストールの確認

“インストールの確認”画面で、インストール内容を確認してください。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]および[標準インストール]の場合に表示される画面です。



- ・ 表示された内容でインストールする場合、[変更しない]を選択したまま、[次へ]をクリックしてください。“17.インストール”画面に移ります。
- ・ 表示された内容を変更する場合、[変更する]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

4. Interstageのインストール先の設定

“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックし、Interstageのインストール先を設定して、[次へ]をクリックしてください。





インストールフォルダに関する注意事項

- インストールフォルダ名には以下の文字を指定できます。

- 半角英数字
- 半角スペース
- 「-」
- 「_」

これら以外の文字を指定すると、サービス登録に失敗して、インストールがハングアップすることがあります。ハングアップした場合には、インストール時のトラブル対処方法の“[■サービスの登録に失敗しハングアップした場合](#)”を参照して対処してください。

- 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要なければ削除してください。

- Windows Server® 2003上でインストールする場合、“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックし、表示された“ディレクトリの選択”画面で以下の操作を行うと、“ディレクトリの選択”画面からカーソルがはずれ、ディレクトリのパスが入力できなくなることがあります。

- 不当なフォルダ(ドライブ名がないなど)を入力し、再入力促すダイアログで[OK]をクリックする
- [キャンセル]をクリックし、再度“インストール先の選択”画面から素早く[参照]をクリックする
- “ディレクトリの選択”画面から別の画面をアクティブな状態にする

上記の場合、[キャンセル]をクリックして“ディレクトリの選択”画面を終了させ、再度“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックして、“ディレクトリの選択”画面で正しいフォルダを入力してください。

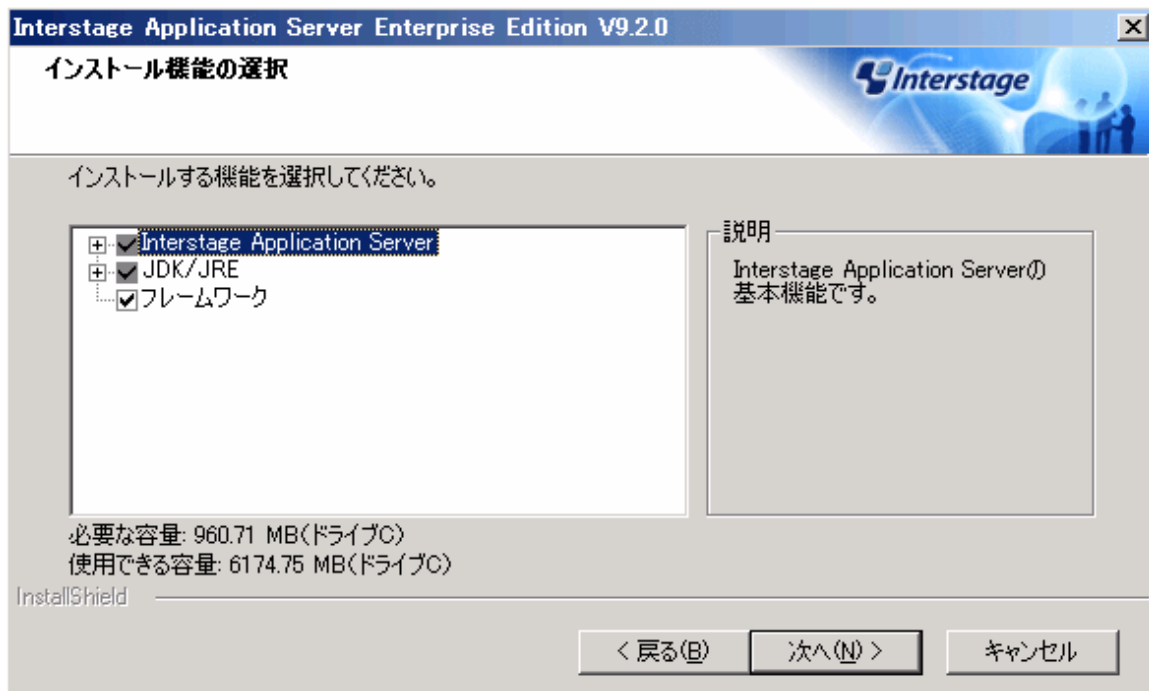
- マルチサーバ管理機能を使用する場合は、“[5.1 マルチサーバ管理機能](#)”にも注意してください。

[アプリケーションサーバ機能をインストール]の[標準インストール]、[管理サーバ機能をインストール]の場合、“[7.JDKまたはJREのインストール先の設定](#)”画面に移ります。

5.インストール機能の選択

本画面は、カスタムインストールや機能の追加と削除の場合に表示されます。

“インストール機能の選択”画面で、インストールする機能をチェックし、[次へ]をクリックしてください。



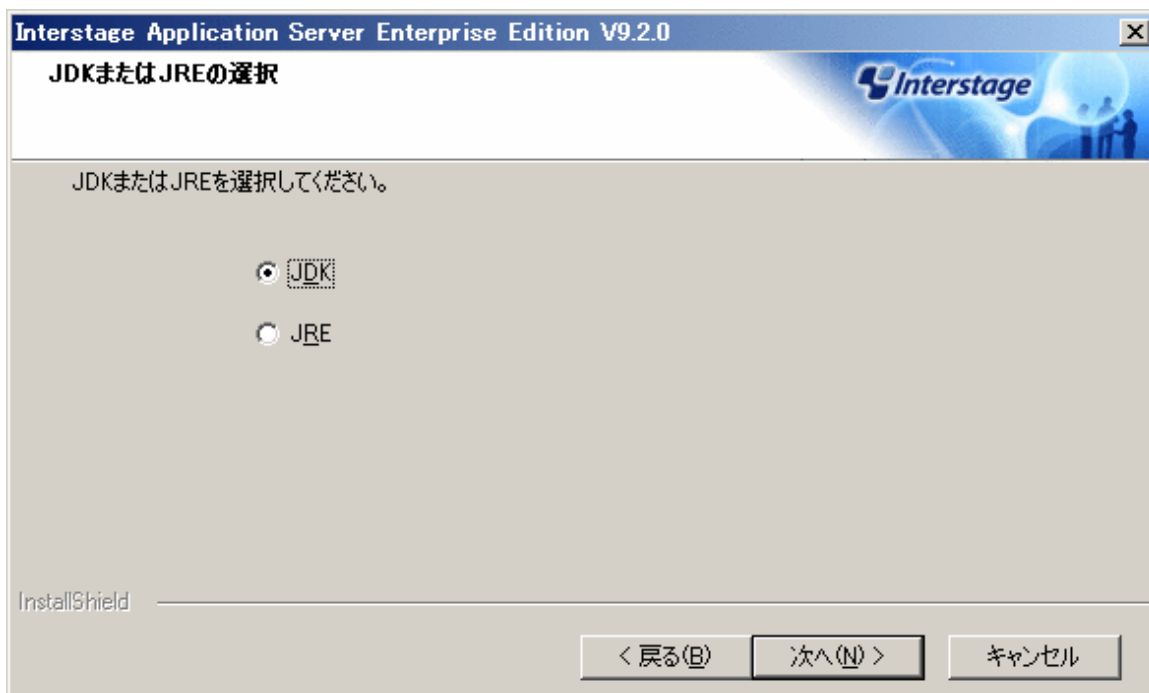
注意

本画面で表示している[必要なディスク容量]よりもさらに約140Mバイト空き容量が必要です。十分な空きを確保してください。

6. JDKまたはJREの選択

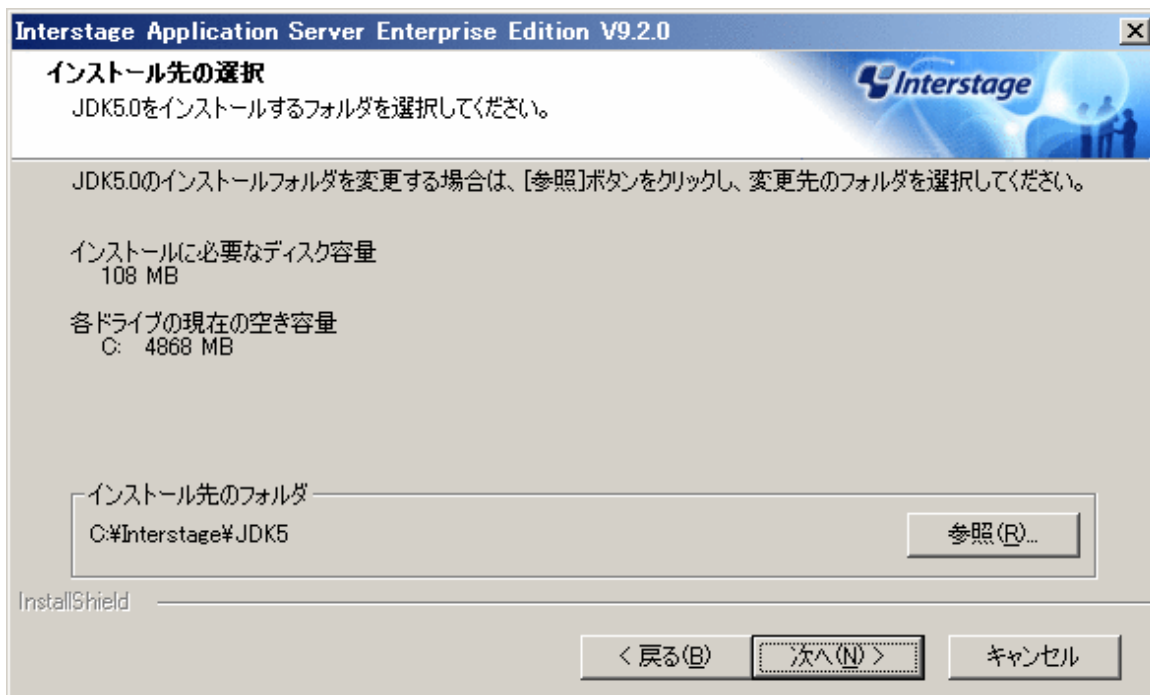
本画面は、カスタムインストールや機能の追加と削除の場合に表示されます。

“JDKまたはJREの選択”画面で、[JDK]または[JRE]を選択し、[次へ]をクリックしてください。



7. JDKまたはJREのインストール先の設定

“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックし、JDKまたはJREのインストール先を設定して、[次へ]をクリックしてください。
カスタムインストールや機能の追加と削除の場合は、選択したJDKまたはJREのインストール先を設定してください。
以下は、[JDK]をインストールする場合に表示される画面です。



注意

- “インストールフォルダに関する注意事項”を参照してください。
- “5.4 JDK/JRE”を参照してください。

8. セキュリティ運用形態の選択

“運用形態の選択”画面で、Interstage管理コンソールのセキュリティ運用形態を選択します。[SSL暗号化通信を使用する]または[SSL暗号化通信を使用しない]を選択し、[次へ]をクリックしてください。

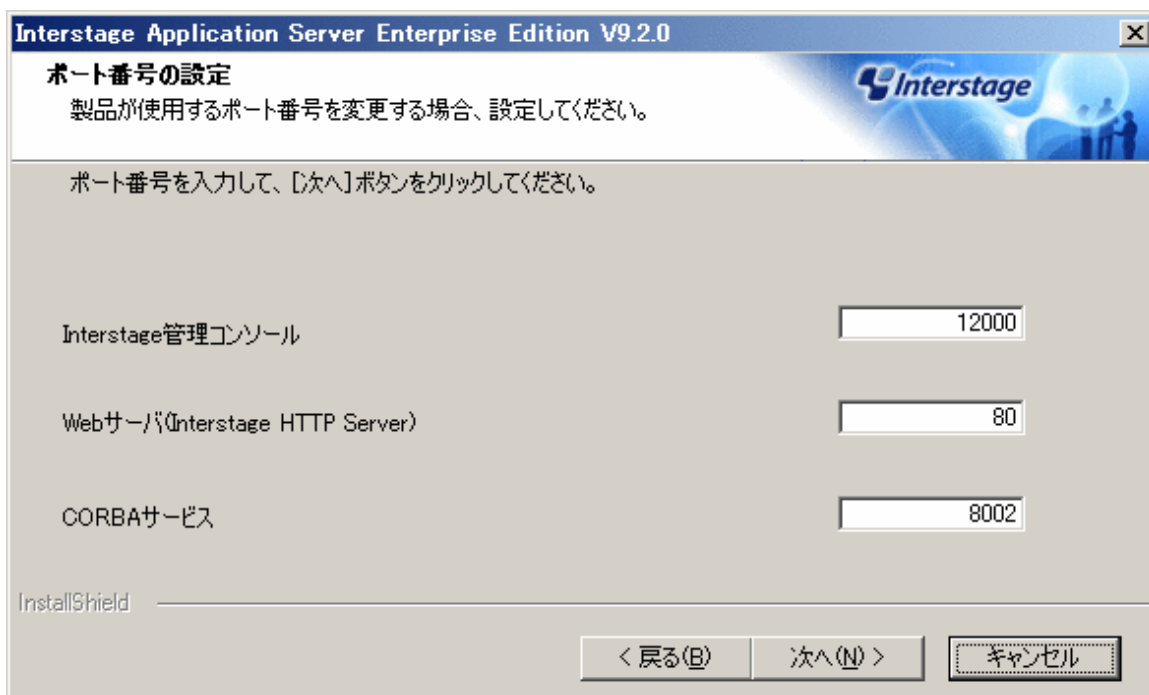


「SSL暗号化通信を使用しない。」を選択した場合は、Interstage管理コンソールをアクセスするためのIDやパスワードなどが、ネットワーク上をそのまま流れます。そのため、通信データが傍受されないような対策を実施することを推奨します。

9.ポート番号の設定

“ポート番号の設定”画面で、使用するポート番号を指定して、[次へ]をクリックしてください。ポート番号を変更しない場合は、そのまま[次へ]をクリックしてください。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]の場合に表示される画面です。



それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。変更する場合、有効な入力値は1～65535の範囲の半角数字です。

アプリケーションサーバ機能のインストールの場合

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000
Webサーバ(Interstage HTTP Server)	80
CORBAサービス	8002

管理サーバ機能のインストールの場合

機能	ポート番号の初期値
Interstage管理コンソール	12000

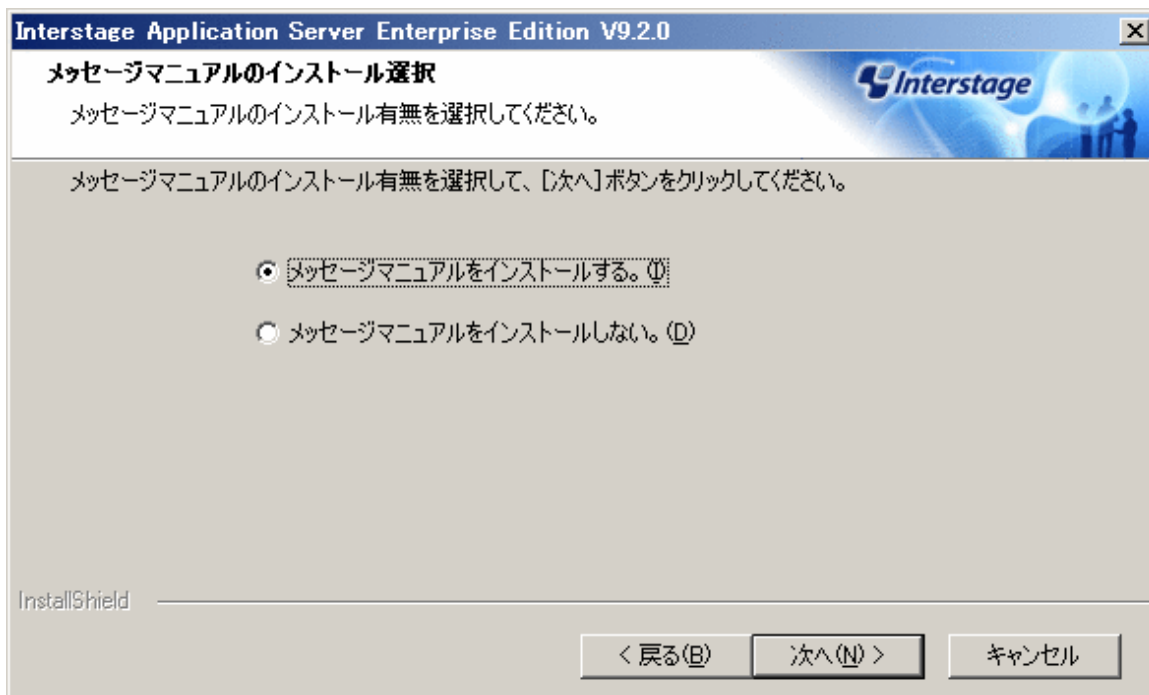
選択したポート番号が、すでに使用されている場合や重複している場合には、以下の“ポート番号の再設定”画面が表示されます。



- ・ポート番号を変更する場合は、未使用のポート番号を入力し、[OK]をクリックしてください。
- ・ポート番号を変更しない場合は、[無視]をクリックしてください。その場合、Interstageの運用を開始する前に、重複したポート番号を使用しているアプリケーションを停止し、ポートが重複しないようにする必要があります。

10.メッセージマニュアルのインストール選択

“メッセージマニュアルのインストール選択”画面で、メッセージマニュアルのインストール有無を選択します。Interstage管理コンソールから直接メッセージマニュアルを参照可能にする場合、[メッセージマニュアルをインストールする。]を選択し、[次へ]をクリックしてください。



ポイント

[メッセージマニュアルをインストールしない。]を選択してインストールし、その後、Interstage管理コンソールからメッセージマニュアルを参照するように変更する場合は、以下の作業を実施してください。なお以下ではC:\Interstage\gui\msgmanにインストールした場合を例に説明します。

1. “C:\Interstage\gui\msgman”フォルダを作成してください。
2. インストールCD-ROM内の“msgman”配下に存在する“ismsg.zip”を“C:\Interstage\gui\msgman”配下に複写してください。
3. コンピュータを再起動してください。

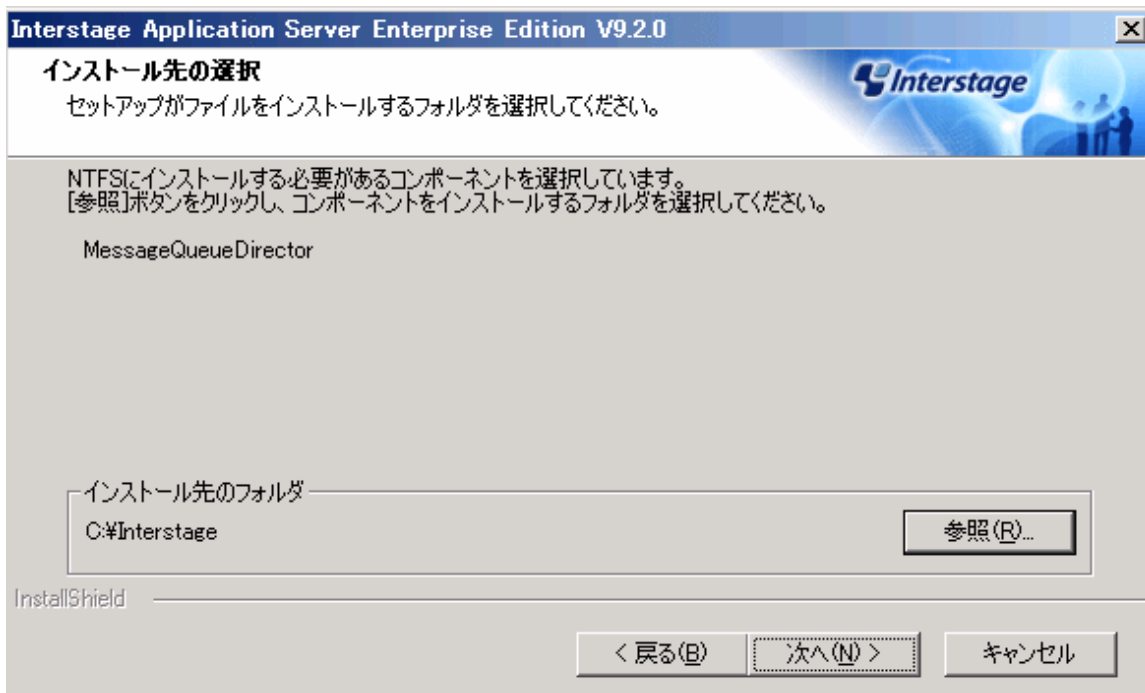
11. MessageQueueDirectorのインストール先の設定

本機能は、64ビットのInterstage Application Server Enterprise Edition でのみ使用できる機能です。他のエディションの場合は、次の手順に進んでください。

本画面は、以下の場合に表示されます。

- MessageQueueDirectorを選択した場合、かつ
- InterstageインストールフォルダがNTFSでない場合

MessageQueueDirectorは、NTFS上にインストールする必要があります。InterstageインストールフォルダがNTFSでない場合、“インストール先の選択”画面が表示されます。MessageQueueDirectorをインストールするNTFS上のフォルダを設定し、[次へ]をクリックしてください。



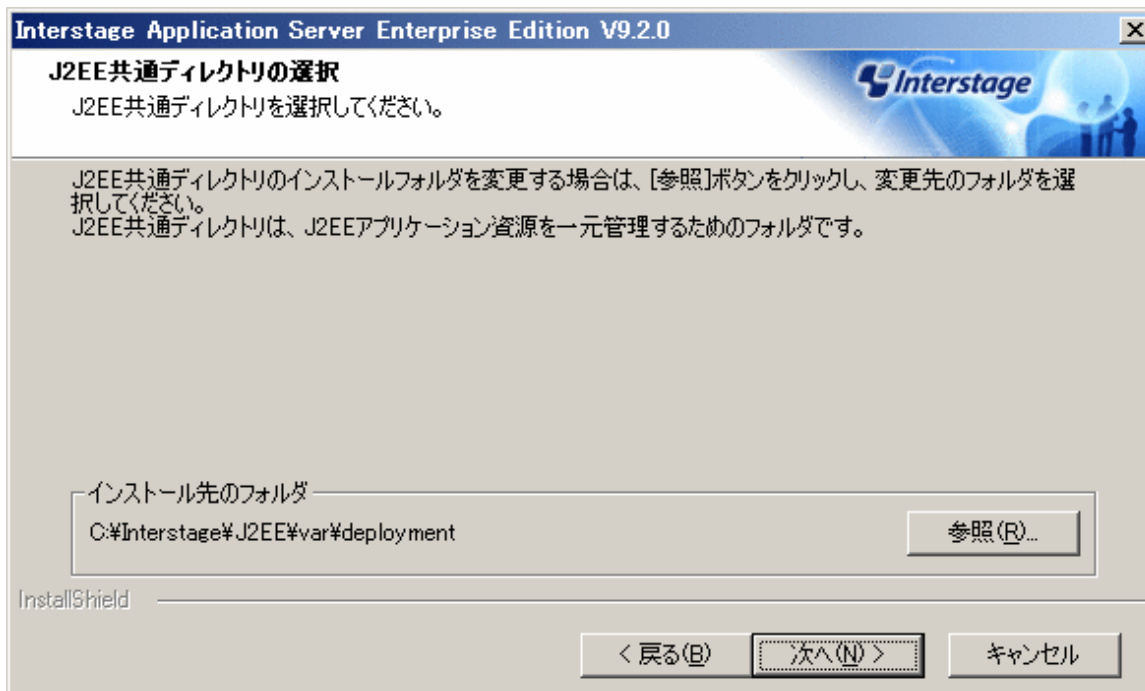
注意

“インストールフォルダに関する注意事項”を参照してください。

12. J2EE共通ディレクトリの作成先の設定

管理サーバ機能のインストールの場合は、J2EE共通ディレクトリの設定はありません。

“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックし、J2EE共通ディレクトリの作成先を設定して、[次へ]をクリックしてください。





“インストールフォルダに関する注意事項”を参照してください。

13.Java EE機能の認証情報の設定

“Java EE機能の認証情報の設定”画面で、管理ユーザーIDおよびパスワードを指定して、[次へ]をクリックしてください。パスワードの確認入力には、パスワードの入力と同じ文字列を入力してください。



入力時の注意事項

設定項目	注意事項
管理ユーザーID	・1文字以上、255文字以内で指定してください。 ・半角の英数字または、“_”、“-”、“.”が使用できます。
パスワード	・8文字以上、20文字以内で指定してください。 ・半角の英数字と記号が使用できます。(空白および制御コードを除く、0x21-0x7eの範囲のascii文字)

14.Java EE機能のポート番号の設定

“Java EE機能のポート番号の設定”画面で、使用するポート番号を指定して、[次へ]をクリックしてください。ポート番号を変更しない場合は、そのまま[次へ]をクリックしてください。

Interstage Application Server Enterprise Edition V9.2.0

Java EE機能のポート番号の設定
Java EE機能が使用するポート番号を変更する場合、設定してください。

ポート番号を入力して、[次へ]をクリックしてください。

IIOPポート	23600
IIOP_SSLポート	23601
IIOP_MUTUALAUTHポート	23602
JMX_ADMINポート	8686

InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

それぞれ以下のポート番号が初期値として設定されています。変更する場合、有効な入力値は1～65535の範囲の半角数字です。

機能	ポート番号の初期値
IIOPポート	23600
IIOP_SSLポート	23601
IIOP_MUTUALAUTHポート	23602
JMX_ADMINポート	8686

15. Java EE機能で使用するJDKの選択

“Java EE機能で使用するJDKの選択”画面で、使用するJDKのバージョンを選択して、[次へ]をクリックしてください。なお、インストール機能として“JDK5.0”のみを選択した場合は、本画面は表示されずに“JDK5.0”がJava EE機能で使用するJDKとして設定されます。



16. Java EE共通ディレクトリの作成先の設定

“インストール先の選択”画面で[参照]をクリックし、Java EE共通ディレクトリの作成先を設定して、[次へ]をクリックしてください。



注意

Java EE共通ディレクトリに関する注意事項

- “インストールフォルダに関する注意事項”を参照してください。
- Java EE共通ディレクトリをデフォルト値から変更する場合は、存在しないフォルダ、または、配下にファイルやフォルダが存在しない空フォルダを指定してください。ただし、いずれの場合も親フォルダは存在する必要があります。
- Java EE共通ディレクトリをデフォルト値から変更する場合は、半角スペースを含むパスを指定することはできません。

17. インストール

“インストールの確認”画面で設定内容を確認し、内容に誤りがなければ、[インストール]をクリックしてください。インストールが開始されます。

インストールを実行することで、インストール機能として選択した機能のセットアップ処理が実行されます。

以下は、[アプリケーションサーバ機能をインストール]および[標準インストール]の場合に表示される画面です。



インストール完了後、[完了]をクリックして、“[4.4 インストール後の作業](#)”を行ってください。“クイックスタートガイド”を参照する場合は、[クイックスタートガイドを開く]をチェック、[完了]をクリックした後、“[4.4 インストール後の作業](#)”を行ってください。
なおインストール時にトラブルが発生した場合は、“[4.5 インストール時のトラブル対処方法](#)”を参照して対処してください。



注意

- インストール時は、セットアップステータスが表示されます。セットアップステータス表示中に、“Alt”キーを押下しながら“C”キーを押下 (Alt+C)したり、[Cancel]、[キャンセル]をクリックしないでください。
実施した場合、インストールがハングアップしたり、インストール資源が削除されずに残る場合があります。インストール時のトラブル対処方法の“[■セットアップステータスでハングアップした場合](#)”または“[■インストール資源が残る場合](#)”を参照して対処してください。
- Web Package機能のインストール時に表示されるセットアップステータスは、アプリケーションサーバ機能および管理サーバ機能のインストール時に表示されるセットアップステータスと異なり、インストール中のファイル名表示なくプログレスバーが進みますが、インストールは正常に行われています。

4.3 機能の追加と削除

現在インストールされている機能に対して機能を追加または削除する方法を説明します。

なおここで説明する手順は、コンピュータの管理者またはAdministratorsグループのメンバーで行ってください。

4.3.1 注意事項

4.3.1.1 セットアップしていた機能をアンインストールする場合

以下の機能をInterstage統合コマンドまたはInterstage管理コンソールを使用してセットアップし、これらの機能を機能の追加と削除でアンインストールする場合は、事前にInterstage統合コマンドまたはInterstage管理コンソールを使用して、これらの機能のサービス削除を行ってからアンインストールを実行してください。

- ・ イベントサービス
- ・ Webサーバ(Interstage HTTP Server)
- ・ SOAPサービス (*)

(*)事前に、CORBA/SOAPクライアントゲートウェイをアンセットアップしてください。

なおセットアップの詳細に関しては、“運用ガイド(基本編)”の“Interstage統合コマンドによる運用操作”、“Interstage管理コンソールによるInterstage運用”を参照してください。

4.3.1.2 ポート番号の設定に関する注意事項

機能の追加と削除で機能追加する場合、インストール時に使用されているポート番号を指定することはできません。このため、削除予定の機能が使用しているポート番号を追加予定の機能が設定しようとする場合、削除予定の機能がポートを使用中のため、設定することができない場合があります。これは、削除予定の機能が起動中の場合、ポートを使用しているため、ポートがすでに使用済みと判断されるからです。この場合、削除予定の機能のサービスを停止し、再度インストール処理を実施してください。

4.3.1.3 マルチサーバ管理機能を使用している場合

Interstageのマルチサーバ管理機能を使用している場合、管理対象サーバに対する機能の追加と削除は行えません。

機能の追加と削除を行う場合は、その管理対象サーバをサイトから削除し、スタンドアロンサーバにしてから実行してください。

4.3.1.4 J2EE機能をアンインストールする場合

機能の追加と削除でJ2EE機能をアンインストールする場合には、事前にInterstage管理コンソールを使用して、IJServerをすべて削除してください。

4.3.1.5 セキュア通信サービスをアンインストールする場合

Interstage管理コンソールのセキュリティ運用形態を[SSL暗号化通信を使用する。]として運用している状態で、セキュア通信サービスをアンインストールする場合は、[SSL暗号化通信を使用しない。]設定に変更してください。設定方法の詳細については、“運用ガイド(基本編)”の“Interstage管理コンソールの構成”－“Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ”の“Interstage管理コンソールのSSL暗号化通信のカスタマイズ”を参照してください。

セキュリティ運用形態を変更した場合は、必要に応じてWindows(R)の[スタート]メニューから[プログラム]> [Interstage]> [Application Server]> [Interstage管理コンソール]のプロパティに指定してあるURLを変更してください。

4.3.1.6 フレームワークをアンインストールする場合

機能の追加と削除でフレームワークをアンインストールする場合は、事前に以下の作業を実施してください。

- ・ フレームワークを使用したアプリケーションをワークユニットに配備している場合、配備解除してください。
- ・ ワークユニットの環境設定において、クラスパスにフレームワークのJARファイルを指定している場合は、クラスパスの設定から削除してください。

4.3.1.7 Java EE機能をアンインストールする場合

機能の追加と削除でJava EE機能をアンインストールする場合は、同時にJDK/JREのアンインストールやJDK/JREの種別の変更をしないください。

上記の変更が必要な場合は、一旦Java EE機能をアンインストールしてから、再度、インストーラを起動させ、機能の追加と削除でJDK/JREの状態を変更してください。

4.3.2 インストール作業

1. インストールの開始

インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、表示される画面（“[1.インストールの開始](#)”を参照）の[インストール]をクリックしてください。

2. 機能の追加と削除の確認

“機能の追加と削除”画面で、[OK]をクリックしてください。



3. インストール機能の選択

“インストール機能の選択”画面が表示されます。

- ・ 機能を追加、削除しない場合は、そのまま[次へ]をクリックしてください。
- ・ 機能を追加、削除する場合は、追加する機能をチェックし、削除する機能のチェックをはずして、[次へ]をクリックしてください。

“インストール機能の選択”画面の詳細と、以降の操作については、新規インストールの“[5.インストール機能の選択](#)”を参照してください。



ポイント

インストール時にサービスが起動中の場合、以下の“サービス停止の確認”画面が表示されます。インストールを続行する場合、[はい]をクリックしてください。自動的にサービスが停止し、インストールが開始されます。



注意

- ・ インストール中は必ずイベントビューアなどのアプリケーションを停止してください。イベントビューアなどのアプリケーションが起動している場合、インストール資源が置き換わらず、誤動作する可能性があります。
- ・ インストール中は、Interstageのセットアップ状態を示す画面(セットアップステータス)が表示されます。セットアップステータスが表示中は、“Alt”キーを押下しながら“C”キーを押下(Alt+C)したり、[Cancel]、[キャンセル]をクリックしないでください。実施した場合、インストールがハングアップする場合があります。インストール時のトラブル対処方法の“[■セットアップステータスでハングアップした場合](#)”を参照して対処してください。
- ・ インストール完了後はコンピュータの再起動を促す画面が表示されます。必ず再起動してください。

4.4 インストール後の作業

■不要なフォルダの削除

インストール中に[キャンセル]をクリックして処理を中断した場合などは、本ソフトウェアのインストール先として指定したインストールフォルダが残ることがあります。必要に応じて削除してください。

■ターミナルサービスの実行モードへの変更

インストール前の作業で、ターミナルサービスをインストールモードに変更した場合は、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスを実行モードに変更してください。

```
CHANGE USER /EXECUTE
```

■Interstageインストール資源のセキュリティ強化

InterstageをNTFS形式のドライブにインストールした場合、インストール資源のアクセス権を変更し、一般ユーザによる資源の改ざんを防ぐことができます。必要に応じて実施してください。

Interstageのインストールフォルダ配下のフォルダおよびファイルに対して、不特定のユーザからのアクセスを防ぐ権限に変更するためには、issetfoldersecurityコマンドを使用します。issetfoldersecurityコマンドについては、“リファレンスマニュアル(コマンド編)”を参照してください。

なお以下に示すInterstageの各種操作を一般ユーザ(コンピュータの管理者およびAdministratorsグループに属さないメンバ)で実施する場合、Interstageインストールフォルダ配下のすべてのフォルダおよびファイルに、操作を行う一般ユーザのアクセス権を設定する必要があります。この場合、アクセス権を設定するユーザ名またはグループ名を指定して、issetfoldersecurityコマンドを実行してください。

以下のコマンドの詳細については、“リファレンスマニュアル(コマンド編)”を参照してください。

- ・ CORBAサービスの以下のコマンド実行時
 - odlistnsコマンド
 - IDLcコマンド
 - odlistirコマンド
- ・ odwin.dllを使用したCORBAアプリケーションの使用時
- ・ EJBサービス運用コマンド実行時
- ・ ワークユニット管理コマンド実行時
- ・ Interstage運用API使用時
- ・ イベントサービス運用コマンド実行時
- ・ JMS運用コマンド実行時
- ・ JMSを使用したアプリケーションの使用時
- ・ バックアップコマンド実行時
- ・ Interstage証明書環境を利用した、SSLなど署名や暗号処理の使用時

■Interstage管理コンソールのSSL暗号化通信の証明書のフィンガープリントの確認

インストール時に、運用形態として「SSL暗号化通信を使用する」を選択した場合は、Interstage管理コンソールのSSL暗号化通信で利用する証明書が生成されています。WebブラウザからInterstage管理コンソールに正しく接続しているかを確認するときのために、ここでは生成されている証明書のフィンガープリントを確認しておきます。

「SSL暗号化通信を使用しない」を選択した場合は、証明書は生成されていないため、本操作を実施する必要はありません。証明書のフィンガープリントの確認方法を以下に示します。

```
"%CommonProgramFiles%\¥Fujitsu Shared¥F3FSSMEE¥cmdspcert.exe" -ed [Interstageインストールフォルダ]¥gui¥etc¥cert -nn SSLCERT | find "FINGERPRINT"
```

証明書のフィンガープリントは以下のように表示されます。

```
FINGERPRINT(MD5): 40 79 98 2F 37 12 31 7C AE E7 B4 AB 78 C8 A2 28  
FINGERPRINT(SHA1): 07 28 BE 26 94 89 6D F9 1E 16 F2 27 D0 6A 7F F1 88 11 98 FB
```

表示されたフィンガープリントは記録しておいてください。

なお、この証明書は、Interstage管理コンソールとWebブラウザ間のSSL暗号化通信において、インストール直後から簡単にSSL暗号化通信が利用できるようにすることを目的に、本製品が自動生成したものです。セキュリティを強化したい場合は、認証局から取得した証明書を利用する運用に切り替えることができます。運用を切り替える方法については、「運用ガイド(基本編)」の「Interstage管理コンソール環境のカスタマイズ」を参照してください。

4.5 インストール時のトラブル対処方法

■環境変数の設定に失敗した場合

インストール終了時に以下のいずれかのメッセージが表示された場合、環境変数の設定に失敗しています(xxxxにはエディション名が出力されることがあります)。

- Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。
以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATHを設定してください。
- Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。
以下のファイルを参照し、システム環境変数にCLASSPATHを設定してください。
- Interstage Application Server xxxxで必要な環境変数の設定ができませんでした。
以下のファイルを参照し、システム環境変数にPATH、CLASSPATHを設定してください。

上記の場合、以下の手順に従って、システム環境変数のPATH、CLASSPATHを設定してください。以下では、「C:¥Interstage」にInterstageをインストールした場合について説明します。

1. 以下の手順で環境変数の設定画面を起動します。

Windows Server® 2003の場合は[コントロールパネル] > [システム] > [詳細設定]の環境変数ボタンをクリックしてください。

Windows Server® 2008の場合は[コントロールパネル] > [システム] > [システムの詳細設定]を選択、ポップアップ表示される[システムのプロパティ]の[詳細設定]の環境変数ボタンをクリックしてください。

2. 不必要なパスを削除し、以下のファイルに記述されているパス情報をシステム環境変数のPATH、CLASSPATHに追加してください。

C:¥Interstage¥path.txt

C:¥Interstage¥classpath.txt

3. コンピュータを再起動してください。



注意

- ・システム環境変数のPATH、CLASSPATHに設定できなかった場合、Interstageや各種サービスは起動されません。上記対処後、コンピュータを再起動することで自動的にInterstageや各種サービスが起動されます。
- ・以下の場合には、インストール時にIJServerは作成されません。必要に応じてInterstage管理コンソールからIJServerを作成してください。
 - ー システム環境変数のPATH、CLASSPATHに設定できなかった場合
 - ー IJServerの作成に必要なサービスの起動が失敗した場合

■自動セットアップが失敗した場合

インストール時の自動セットアップが失敗した場合、自動セットアップの異常を示すダイアログが表示されます。自動セットアップの異常を示すダイアログおよびイベントビューアに出力されたメッセージの対処を行った上で、以下の対処を行ってください。

- ・インストールが完了している場合は、isiniterviceコマンドによりセットアップを実施してください。isiniterviceコマンドの詳細は、“リファレンスマニュアル(コマンド編)”を参照してください。
- ・インストールに失敗した場合は、再度インストールしてください。

■ファイルコピーなどの異常が発生した場合

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合、コンピュータの再起動を促す画面が表示されます。その場合、インストール終了後に表示されるコンピュータ再起動の選択画面で、「はい、今すぐコンピュータを再起動します。」または「いいえ、後でコンピュータを再起動します。」を選択し[完了]ボタンをクリックしてください。

インストール時にファイルコピーなどの異常が発生した場合のインストール処理は、コンピュータの再起動をもって完了します。「いいえ、後でコンピュータを再起動します。」を選択した場合、Interstageの環境作成の前にコンピュータの再起動が必要です。

■サービスの起動に関するエラーメッセージが出力された場合

インストール時にサービスの起動に関する以下のエラーメッセージが出力された場合の対処について説明します。

- ・以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。
Interstage Operation Tool

上記の場合、イベントビューアを参照し、「IS: 情報: is21011: INTERSTAGE Operation Toolを正常に停止しました。」が出力されている場合、動作に問題はありません。出力されていない場合は、イベントビューアに他のメッセージが出力されていないかを確認し、そのメッセージを参照して、失敗の原因を取り除いてください。

- ・以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。
TransactionDirector

上記の場合、イベントビューアを参照し、「TD: 情報: td11001: TDを正常に起動しました」が出力されている場合、動作に問題はありません。

- ・以下のサービスの起動処理でエラーが発生しました。
FJapache

上記の場合、Webサーバ(Interstage HTTP Server)に設定したポート番号が、他のサービス(Microsoft(R) Internet Information Servicesなど)に設定されているポート番号と重複していないかを確認してください。ポート番号が重複している場合は、そのサービスを停止させるか、異なるポート番号を設定してください。Webサーバ(Interstage HTTP Server)のポート番号の設定方法については、“Interstage HTTP Server 運用ガイド”の“環境設定”－“環境定義ファイル”－“ポート番号とIPアドレスの設定”を参照してください。

ポート番号の設定に問題がない場合は、イベントビューアを参照し、メッセージが出力されていないかを確認してください。メッセージが出力されている場合は、“メッセージ集”を参照してそのメッセージに対する対処を行ってください。

■ターミナルサービスが実行モードの場合

以下の場合、ターミナルサービスが実行モードの可能性があります。

- ・以下のメッセージが出力された場合
「エラー番号:0x80040702 詳細:dllのロードに失敗しました。:odautosetup」
- ・イベントビューアにメッセージihs00012が出力された場合

- ・ インストールに失敗し、「エラー: is20102:INTERSTAGEの起動に失敗しました 理由コード(10)」のポップアップが出力される。

上記の場合、Interstageをアンインストールした後、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更し、再度Interstageをインストールしてください。

CHANGE USER /INSTALL

Interstageのインストール完了後、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスを実行モードに変更してください。

CHANGE USER /EXECUTE

■セッアップステータスでハングアップした場合

セッアップステータス表示中に“Alt”キーを押下しながら“C”キーを押下(Alt+C)、または[Cancel]、[キャンセル]をクリックした場合、サービスの登録処理に失敗した旨のポップアップメッセージが表示され、Interstageのインストールがハングアップすることがあります。

このような状態になった場合は、Interstageの資産・情報を削除した後、Interstageを再インストールしてください。

Interstageの資産・情報の削除方法は、インストールCD-ROMドライブの直下の“HowToDel.txt”(ドライブEの場合、E:¥HowToDel.txtです)を参照してください。

■サービスの登録に失敗しハングアップした場合

インストールフォルダ名に使用できない文字、および記号を指定してインストールすると、サービス登録に失敗して、Interstageのインストールがハングアップすることがあります。

このような状態になった場合は、Interstageの資産・情報を削除した後、Interstageを再インストールしてください。

Interstageの資産・情報の削除方法は、インストールCD-ROMドライブの直下の“HowToDel.txt”(ドライブEの場合、E:¥HowToDel.txtです)を参照してください。

■インストール資源が残る場合

セッアップステータス表示中に[Cancel]、[キャンセル]をクリックした場合、Interstageのインストール資源が残る場合があります。

このような状態になった場合は、以下の作業を行ってください。

- ・ 以下のフォルダが残っている場合は、削除してください(以下はC:¥Interstageにインストールしていた場合)。
 - ー C:¥Interstage¥ODWIN
 - ー C:¥Interstage¥F3FMsoap
- ・ CORBAサービスのファイルが残っている場合は、削除してください。なお、Systemwalker Centric Managerの運用管理サーバを導入している場合は、削除後Interstageを再インストールしてください。

1. WINSYSDIR配下の以下のファイル

f3fmdgst.dll
 f3fmdgst_sv.dll
 f3fmic23.dll
 f3fmic25.dll
 f3fmic27.dll
 F3FMIC35.DLL
 F3FMIC77.DLL
 f3fmicis.dll
 libomircbl.dll
 LIBOMIRCBLLMT.DLL
 LIBOMIRCBLLMTSV.DLL
 libomircblsv.dll
 LIBOMIRCBLSVUC.DLL
 LIBOMIRCBLLUC.DLL
 LIBOMIROOCOB.dll
 LIBOMIROOCOBSV.dll
 LIBOMIROOCOBSVUC.dll
 LIBOMIROOCOBUUC.dll

ODadmin.dll
 odautosetup.dll
 Odcn.dll
 Odcncpp.dll
 ODCNOOCOB.DLL
 ODCNOOCOBUC.DLL
 Odcnscpp.dll
 ODCNSOOCOB.DLL
 ODCNSOOCOBUC.DLL
 Odcnsv.dll
 ODCOBCBL.DLL
 ODCOBCBLMT.DLL
 ODCOBCBLMTSV.DLL
 ODCOBCBLSV.DLL
 ODCOBCBLSVUC.DLL
 ODCOBCBLUC.DLL
 ODEVTLOG.DLL
 ODIF.DLL
 Odif_r.dll
 ODIFSV.DLL
 Odifsv_r.dll
 ODIRLOG.DLL
 ODiruty.dll
 ODjava4.dll
 ODjvas4.dll
 ODjvasv4.dll
 odlbo.dll
 odlbosv.dll
 ODLBSCBL.DLL
 ODLBSCBLMT.DLL
 odlbscpp.dll
 ODLBSOOCOB.dll
 ODmisc.dll
 ODOBF.DLL
 ODOLE.INI
 ODsocket.dll
 ODsocket_ipv6.dll
 ODsocketsv.dll
 ODsocketsv_ipv6.dll
 Odsv.dll
 ODSVCPP.DLL
 odtscck.dll
 ODuty.dll
 odwin.dll
 ODWIN.INI
 ODWINCPP.DLL

2. WINSYSDIR¥system32配下の以下のファイル

InterfaceRep_Cache_s.exe
 InterfaceRep_e.exe
 Naming.exe
 ODEVTMSG.DLL
 ODLOADER.EXE
 Odstart.exe

- F3FSSMEEのレジストリ情報が残っている場合は、以下に従い削除してください。
 1. ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合
 以下のキーを削除してください。
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥F3FSSMEE
 2. ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけではない場合
 以下のキーを削除してください。
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥F3FSSMEE¥Parent Product¥INTERSTAGE
- Securecrypto Library Rのレジストリ情報が残っている場合は、以下に従い削除してください。
 1. ¥HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥ Install ¥ Securecrypto Library R ¥ Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合
 以下のキーを削除してください。
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥SecurecryptoLibraryCommon
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Securecrypto Library R
 2. ¥HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥ Install ¥ Securecrypto Library R ¥ Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけではない場合
 以下のキーを削除してください。
 ¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R¥Parent Product¥INTERSTAGE
- F3FSSMEEのファイルが残っている場合は、以下に従い削除してください。
 レジストリの¥HKEY_LOCAL_MACHINE ¥ SOFTWARE ¥ Fujitsu ¥ Install ¥ F3FSSMEE ¥ Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合、以下の資材を削除してください。
 "INTERSTAGE"以外のキーが存在する場合は、削除しないでください。
 1. C:¥Program Files¥Common Files¥Fujitsu Shared¥F3FSSMEEフォルダ (システムドライブがC:の場合)
 2. C:¥Program Files¥F3FSSMEEフォルダ(システムドライブがC:の場合)
 3. WINSYSDIR¥system32配下の以下のdll
 - f3eztdat.dll
 - F3FGssl4.dll
 - F3FGssl6.dll
 - F3FPSASN.dll
 - F3FPSP07.dll
 - F3FPSP11.dll
 - F3FSBCER.DLL
 - F3FSBCMN.DLL
 - F3FSBKEY.DLL
 - F3FSCRTM.DLL
 - F3FSCRTM2.dll
 - F3FSCRTM3.dll
 - f3fsscmi.dll
 - f3fssmime.dll
 - F3FSTP12.dll
 - F5eubcer.dll
 - F5EUBCEX.dll
 - F5EUbcmn.dll
 - F5eubkey.dll
 - F5EUJSCM.dll
 - F5EUscmi.dll
 - F5EUsmime.dll

F5EUsp07.dll
F5EUsp11.dll
F5EUssl4.dll
F5EUssl6.dll
F5eutp12.dll

- Securecrypto Library Rのファイルが残っている場合は、以下に従い削除してください。

レジストリの¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Fujitsu¥Install¥Securecrypto Library R¥ Parent Product配下のキーが"INTERSTAGE"だけの場合、以下の資材を削除してください。

"INTERSTAGE"以外のキーが存在する場合は、削除しないでください。

1. C:¥Program Files¥SecurecryptoLibraryRフォルダ(システムドライブがC:の場合)
2. WINSYSDIR¥system32配下の以下のdll

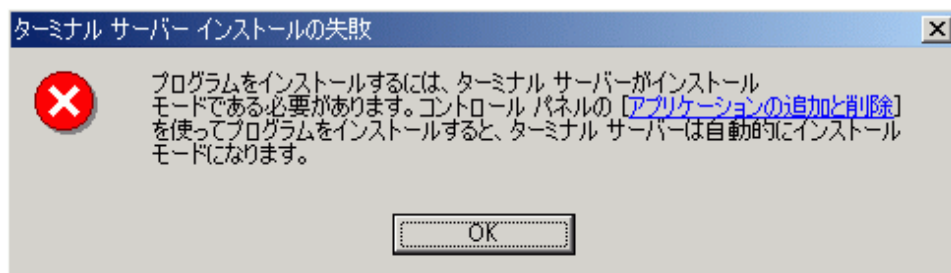
F3EZsclcmd.dll
F3EZcmn.dll
F3EZdat.dll
F3EZeex.dll
F3EZmain.dll
F3EZscl.dll
F3EZscl2.dll

■不適切な画面が表示された場合

Interstageのインストール時に、以下のような画面が表示された場合、ターミナルサービスが実行モードの可能性があります。

- Windows® 2000の場合

以下の画面の[OK]をクリックし、“[4.1 インストール前に必須な作業](#)”を行った後、Interstageのインストールを行ってください。



- Windows Server® 2003の場合

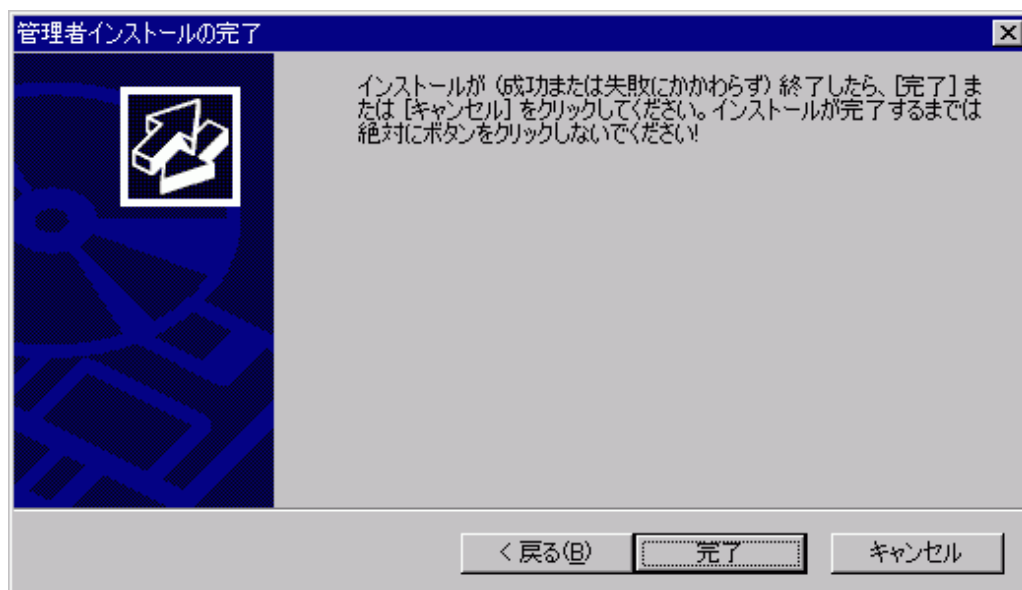
以下に示す手順でInterstageのインストールを行ってください。

1. Interstageのインストール完了、またはコンピュータの再起動を促す画面が表示されるまでインストール作業を行います。

2. 表示されている下記の画面の[次へ]をクリックします。



3. 下記の画面が表示されたら[完了]をクリックします。



4. Interstageのインストール完了、またはコンピュータの再起動を促す画面の[完了]をクリックします。

■イベントビューアにtd11052の警告メッセージが出力された場合

インストール時にイベントビューアに下記警告メッセージが出力される場合があります。

TD: 警告: td11052:ワークユニットの自動起動に失敗しました(IJServer-definition error)

上記の場合、問題はありませのでメッセージは無視してください。

■Java EE機能のセットアップに失敗した場合

Java EE機能に関する以下のメッセージが出力され、その後Interstage Java EE DASサービスおよびInterstage Java EE Node Agentサービスの起動に失敗する場合があります。

- ・ ijinitの実行に失敗しました

上記の場合、インストールの終了後にijinitコマンドを実行してJava EE運用環境の初期化を行ってください。ijinitコマンドの詳細については、“Java EE運用ガイド”を参照してください。

第5章 特定の機能に関する注意事項

特定の機能に関する注意事項について説明します。

5.1 マルチサーバ管理機能

マルチサーバ管理機能を使用する場合、サーバグループに所属するすべての管理対象サーバにおいて、同じインストールフォルダにインストールする必要があります。たとえインストールフォルダに同じフォルダ名を指定しても、短いパス(ショートパス)となり、異なるフォルダ名として扱われる場合があります。

インストールフォルダ名が短いパス(ショートパス)として扱われる場合の条件を以下に示します。

1. インストール時に、“インストール先の選択”画面で、インストールフォルダに空白を含むフォルダ名を指定した場合、かつ
2. 1.で指定したフォルダと同じ階層に、先頭文字からn文字(注)以上の範囲が重複(一致)する名前のフォルダが存在した場合。

注) nは、重複するフォルダの数に応じて、以下のように異なります。

フォルダの数が2～9の場合:6文字

フォルダの数が10～99の場合:5文字

フォルダの数が100～999の場合:4文字

■ショートパスが異なる問題

マルチサーバ環境において、インストールフォルダと同じ階層に、フォルダ構成がサーバ間で異なる(重複した名前のフォルダが存在するしないなど)場合、同じ名前のインストールフォルダを指定してもサーバ間で短いパス(ショートパス)が異なってしまいます。

その結果、管理対象サーバ間で環境定義内容が異なり、サーバグループへ管理対象サーバを追加する際にエラーが発生します。

サーバ名	サーバA	サーバB
インストール先のフォルダ構成	“C:¥Interstage A”が存在する	Cドライブには、“Inte”から始まるフォルダが存在しない
指定したインストールフォルダ名	“C:¥Interstage B”	“C:¥Interstage B”
インストールフォルダの短いパス(ショートパス)名	“C:¥INTERS~2”	“C:¥INTERS~1”



ポイント

ショートパス名は、コマンドプロンプト上で“dir /X”と実行することで調べることができます。

■対処

マルチサーバ環境を構築するにあたり、すべての管理対象サーバのインストールフォルダについて以下を確認してください。

1. 先頭文字から4～6文字で、重複するフォルダ名が他にないかを確認します。
2. 1.で重複するフォルダ名がすでに存在している場合は、名前を変更するか、または空白を含まないフォルダ名を指定します。すべての管理対象サーバに対して同じ設定を行います。

上記の例の場合は、サーバAにおいて、“C:¥Inters”の部分で重複しているフォルダ名が存在するため、この部分を重複しないよう“C:¥IS”に変更するか、空白を含まないように“C:¥Interstage”または“C:¥InterstageB”などを指定してください。サーバAおよびサーバBに同じ設定を行います。

なお誤って重複したフォルダ名でインストールした場合は、Interstageをアンインストールし、再インストール時に上記の要領で正しいフォルダ名を設定してください。

5.2 Webサーバ(Interstage HTTP Server)

管理サーバ機能のインストール直後は、Webサーバの動作環境が作成されません。管理サーバ機能をインストールしたシステム上のWebサーバを運用する必要がある場合は、ihscreateコマンドを使用してWebサーバの動作環境を作成してください。ihscreateコマンドについては、“リファレンスマニュアル(コマンド編)”の“Interstage HTTP Server運用コマンド”を参照してください。

5.3 Fujitsu Enabler

- Fujitsu Enablerサービスが使用するポート番号の初期値は9700です。
Fujitsu Enablerサービスの使用するポート番号を初期値から変更したい場合は、以下の方法で他のアプリケーションや他のFujitsu Enablerのデータストアが使用していないものに変更してください。
`%IS_HOME%\¥Enabler¥server¥bin¥omschangeport.exe -u "新しいポート番号"`

Fujitsu Enablerサービスのポート番号を変更する場合は、以下の状態である必要があります。

- Fujitsu Enablerサービスが起動している
- Interstage ディレクトリサービスのリポジトリが停止している

なお、Fujitsu Enablerサービスが使用しているポート番号は、以下のファイルに定義されています。“OMS_SERVICE=”に定義されている値が、Fujitsu Enablerサービスが使用しているポート番号です。

`%IS_HOME%\¥Enabler¥server¥param¥enabler.conf`

- リポジトリが使用するポート番号の初期値は、6000～65535のうち、リポジトリ生成時に使用されていない番号です。リポジトリの使用するポート番号を初期値から変更したい場合は、以下の方法で他のアプリケーションや他のFujitsu Enablerのデータストアが使用していないものに変更してください。
`%IS_HOME%\¥Enabler¥server¥bin¥omschangeport.exe "リポジトリ名" -pn "新しいポート番号"`

なお、Fujitsu Enablerのデータストアが使用しているポート番号は、以下の方法で、確認してください。

`%IS_HOME%\¥Enabler¥server¥bin¥omslist.exe -l`

【実行結果例】

```
-----
rep001: server=host01 port=6000 XF
rep002: server=host01 port=6001 XF
-----
```

「port」の値が、Fujitsu Enablerのデータストアが使用しているポート番号です。

5.4 JDK/JRE

■ホスト名に設定できる文字

ホスト名には、図1に示す文字を使用してください。

- アルファベット大文字(“A”～“Z”)
- アルファベット小文字(“a”～“z”)
- 数字(“0”～“9”) (注1)
- ハイフン(“-”) (注2)
- ピリオド(“.”) (注2)

(注1) 最後のピリオドの直後には、数字は使用できません。

(注2) ハイフンおよびピリオドは、ホスト名の先頭文字として使用できません。また、ピリオドは、ホスト名の最後に指定できません。

図1 ホスト名に設定可能な文字

JDK/JREを使用する場合、ホスト名には、図1以外の文字を使用できません。

ホスト名に図1以外の文字(例: “_”(アンダースコア))を使用した場合、インストール時に、Interstage Operation Toolサービスの起動に失敗した旨のエラーダイアログが、表示されます。エラーダイアログの表示後もインストール処理は継続されますが、IJServerの作成に失敗した旨のエラーダイアログが表示されます。

インストール完了後、Interstage管理コンソールにログインすると、「IS: エラー: is40003: Interstage JMXサービスに接続できませんでした」のメッセージが出力され、Interstageの運用操作は行えません。

5.5 フレームワーク

動作環境の設定方法の詳細については、“Apcoordinatorユーザズガイド”を参照してください。

付録A Fujitsu XMLプロセッサのインストール

Fujitsu XMLプロセッサはInterstageのインストールではインストールされません。インストールCD-ROMをコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、以下の作業を行ってください。

1. インストールCD-ROM内の“¥XML¥setup.exe”をダブルクリックし、表示される画面に従いFujitsu XMLプロセッサをインストールしてください。
2. インストール終了時に、コンピュータの再起動の確認ダイアログが表示された場合は、必ず再起動を行ってください。

なおFujitsu XMLプロセッサのマニュアルはFujitsu XMLプロセッサのインストール後、[スタート]>[プログラム]>[Fujitsu XMLプロセッサ V5.2]で参照してください。



注意

- ターミナルサービスが実行モードの状態でインストーラを起動した場合は、一度インストーラを終了させ、以下のコマンドを実行して、ターミナルサービスをインストールモードに変更してください。
インストール完了後は、以下のコマンドを実行して、実行モードに変更してください。
実行モードでインストールを行った場合、正常にインストールされません。Fujitsu XMLプロセッサをアンインストール後、ターミナルサービスをインストールモードに変更した後、再度インストールを行ってください。

[インストール前]

CHANGE USER /INSTALL

[インストール終了後]

CHANGE USER /EXECUTE

付録B サイレントインストール

通常、本製品をインストールする場合、利用する各機能で必要な情報を対話形式で入力します。
サイレントインストール機能を利用することにより、同じ設定でインストールする場合には、対話形式の情報入力を一切行わずインストールすることができます。

■使用上の条件

- ・ Interstageが、対象のシステムにインストールされている場合には、本機能を使用することはできません。事前に、Interstageをアンインストールしてから実施してください。
- ・ ターミナルサービスが運用されている環境においては、ターミナルサービスをインストールモードに変更してから実施してください。ターミナルサービスが実行モードの状態では本機能を実行するとインストールに失敗します。
インストールモードへの変更方法

CHANGE USER /INSTALL

■サイレントインストールの手順

以下の手順でインストールしてください。

1. サイレントインストール応答ファイルの作成

サイレントインストールを行う場合、対話形式で入力する情報が記述された応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルは、以下の手順で一度インストールを行い、そのインストール情報から作成します。

1) インストーラの起動

応答ファイルを作成する場合、以下のパラメタでインストーラを起動してください。

(CD-ROMドライブ)¥ISTAGE¥Disk1¥issetup.exe -r

2) 必要な機能の選択と設定

通常のインストールと同様に、サーバタイプ、インストールタイプ、機能を選択してください。また、必要に応じて設定値を変更してください。ここで設定した内容と同一の設定でサイレントインストール対象のコンピュータにもインストールされます。

3) 応答ファイルの作成

実際にインストールを実行します。インストール後、Windowsシステムルートフォルダ配下にsetup.issという応答ファイルが作成されます。

2. サイレントインストールの実行

“1.サイレントインストール応答ファイルの作成”で作成した応答ファイル(setup.iss)を用いてサイレントインストールを実行します。

1) 応答ファイル(setup.iss)の格納

サイレントインストールを行うコンピュータ上の任意のフォルダに応答ファイル(setup.iss)を格納してください。

2) サイレントインストールの実行

CD-ROMドライブにサーバパッケージのCD-ROMをセットし、以下のパラメタでインストーラを起動します。このとき、インストール結果を保存するログファイルも指定します。なお、コマンド実行後、すぐ復帰しますが、インストールは実行されます。

例) 応答ファイルがc:¥tmp¥setup.iss、ログファイルがc:¥tmp¥setup.logの場合

(CD-ROMドライブ)¥ISTAGE¥Disk1¥issetup.exe -s -f1c:¥tmp¥setup.iss -f2c:¥tmp¥setup.log

※上記の操作は1コマンドです。改行を入れずに実行してください。

3) インストール結果の確認

ログファイルを開き、[ResponseResult]セクションの“ResultCode”を参照してください。以下に復帰値の意味を記載します。

ResponseResultの値	意味
------------------	----

0	インストール成功
-1	インストール失敗 インストール途中に、インストーラがエラーを検出した場合
-3	対象システムの環境により、応答ファイルと異なるシーケンスで実行された場合 ・インストールフォルダ配下にInterstageの資源が残っている、またはInterstageがインストール済 ・ディスク容量不足 ・排他ソフトウェアが存在 ・応答ファイル作成時に設定したポート番号が使用されている。 ・異なるバージョン・レベル／エディション、またはクライアントパッケージのインストーラを用いて作成した応答ファイルを指定した場合。
-5	指定した応答ファイル(setup.iss)が見つからない
-8	応答ファイルの内容が不当

■エラーが発生した場合の対処

ログファイルの[ResponseResult]セクションの“ResultCode”にエラーが設定されている場合、以下で該当する対処を実施し、サイレントインストールを実行してください。

ResponseResultの値	対処
-1	インストール中にエラーが発生しています。 以下の資料を採取し、技術員に連絡してください。 ・Windowsシステムルートフォルダ配下のisasinst.log
-3	以下を確認し、各々のエラーとなる原因を取り除いてください。 ・指定したインストールフォルダ配下にInterstageの資源が残っている場合には、指定したフォルダを削除またはインストールフォルダを変更してください。 ・Interstageがインストール済の場合は、インストール済のInterstageをアンインストールしてから、再度インストールを実施してください。 ・インストール先のディスク容量が不足している場合は、ディスクに必要な空きを作ってからインストールを実施してください。 ・排他ソフトウェアが存在する場合には、排他ソフトウェアをアンインストール後、再度インストールを実施してください。 ・応答ファイル作成時に設定したポート番号が他のアプリケーションに使用されている場合は、該当のアプリケーションを停止させてから、再度インストールしてください。この場合に本製品を正常に運用するためには、該当するポート番号を他のアプリケーションで使用しないようにするか、本製品のポート番号の設定をカスタマイズする必要があります。 ・応答ファイルは、同一のバージョン・レベル／エディションのサーバパッケージ用インストーラで作成したファイルを指定してください。
-5	指定した応答ファイル(setup.iss)が見つからないため、サイレントインストール実行時に指定した応答ファイルのパスに誤りがないか確認してください。
-8	指定した応答ファイル(setup.iss)が壊れている可能性があります。応答ファイルを再作成してから、再度インストールを実施してください。
上記以外	以下の資料を採取して、技術員に連絡してください。

•使用した応答ファイル •ログファイル •システムフォルダ配下に出力されるisasinst.log（通常は、“c:¥Windows ¥isasinst.log”に出力されます。）
--

■注意事項

- 応答ファイルは、インストーラが確実に終了 (InstallShield Wizardの完了画面で完了ボタンを選択) した後で取得してください。
- サイレントインストールを実行するコンピュータ上には、応答ファイル作成時に指定したインストールフォルダと同じドライブを準備する必要があります。
- サイレントインストールは、非同期で実行されます。サイレントインストール直後にセットアップなどの処理を行う場合はご注意ください。
- ログファイルの[ResponseResult]-セクションの“ResultCode”には、サイレントインストール終了時に最終結果が書き込まれます。インストール実行中は、インストール成功を示す“0”が設定されていますので、サイレントインストールの実行プロセスである“setup.exe”または、“_is[X].exe”(Xは1～4桁の16進数)が終了してから確認してください。
- Windows Server(R) 2008でサイレントインストールを実行する場合、ユーザーアカウント制御 (UAC) の警告メッセージが表示されることがありますが、処理を続行してください。なお、ユーザーアカウント制御を無効化することで表示を抑止することもできます。
- 環境変数の設定値の有効長を超えてしまうなどで、本製品で使用する環境変数の設定に失敗した場合、インストール終了前に、環境変数の設定に失敗した旨と該当する環境変数名が警告ポップアップにて表示されます。この場合、インストール終了後に該当する環境変数から不要な設定を削除し、以下のファイルに記述されているパス情報を追加した後、コンピュータを再起動してください。
 - 環境変数PATHの設定に失敗した場合: インストールフォルダ¥path.txt
 - 環境変数CLASSPATHの設定に失敗した場合: インストールフォルダ¥classpath.txt
- インストール前にターミナルサービスをインストールモードに変更した場合、インストール終了後に実行モードに変更してください。
実行モードへの変更方法

CHANGE USER /EXECUTE

付録C Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル

Interstage管理コンソールは、Interstage Application Serverの各サービスに対する操作ビューを統合しており、一元的な操作を実現しています。

ここでは、標準インストールによりインストールされるInterstageを、Interstage管理コンソールにより安全に運用する方法として、ひとつのモデルを説明します。

- [Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル](#)

Interstage管理コンソールの詳細は、“運用ガイド(基本編)”を参照してください。

■Interstage管理コンソールによるInterstage運用を安全にご利用いただくモデル

標準インストールによりインストールされるInterstageを、Interstage管理コンソールにより安全に運用する方法として、10個のポイントを説明します。

- Interstageをインストールするマシンは、信頼できない者の立入りが禁止されたシステム運用区画に配置します。
- OSへのリモートログインサービスをすべて停止してください。rlogin、rsh、telnet、ftpなどのリモートログインを可能とするプロセスが動作していないことを確認し、動作していた場合にはすべて停止してください。
- Interstageをインストールするとき、Interstage管理コンソールの“運用形態の選択”画面で、「SSL暗号化通信を使用する。(U)」を選択します。
- Interstage管理コンソールを使用するユーザは、割り当てられたロールに課せられた責務に責任を持ち、不正な行為を行わない者に限定します。ロールについては、“運用ガイド(基本編)”を参照してください。
- 本製品で使用するアプリケーションは、作成元が特定できること、また、作成元でのテストによって品質が確保されていることを確認してから、動作させるようにしてください。
- 資源のバックアップ／リストアなどの保守操作時を除き、通常の運用操作はInterstage管理コンソールだけで行ってください。
- 不正アクセス、誤操作などによるデータ破壊に起因するシステム異常に対処するため、保護対象資源は定期的にバックアップを採取してください。
- アプリケーションそのものは正しく作成されていても、ネットワークやハードウェアの異常などによりアプリケーションの異常終了や長時間停止が発生することがあります。アプリケーションのこれらの異常への対応方針を決定し、それに基づいて、ワークユニットのリトライカウント、アプリケーション最大処理時間などの設定を行ってください。
- ユーザ認証には、汎用的なOS認証を使用してください。
- Interstage管理コンソールを動作させるブラウザは、128ビット以上の暗号に対応したものを使用してください。

付録D Java監視機能のインストール

ここではJava監視機能をインストールする方法および注意事項を説明します。

D.1 インストール時に必要な環境

Java監視機能は、32ビット環境のWindowsで動作するプログラムです。

Java監視機能をインストールする場合には、約350MBのディスク容量が必要です。

D.2 Java監視機能のインストール

Java監視機能は、以下の手順でインストールしてください。



インストール前にすべてのアプリケーションを終了してください

インストールを行う前に、すべてのアプリケーションを終了させてください。

Java監視機能をインストールする際に、Java監視機能が利用するディスク、レジストリ等の資源を使用しているとインストール作業に失敗する場合があります(例: イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタ等)。

1. インストールCD-ROM (オプションパッケージ CD) をコンピュータのCD-ROMドライブにセットし、インストールCD-ROM内の“¥fjconsole¥setup.exe”を実行して、表示される画面で[次へ]ボタンをクリックしてください。
2. “インストール先の選択”画面で、[参照]ボタンをクリックし、Java監視機能のインストール先を設定し、[次へ]ボタンをクリックしてください。



インストール先について

- ー インストールフォルダ名に、“:”、“/”、“*”、“?”、“<”、“>”、“|”、“”” は指定できません。
- ー 一度設定したフォルダ以外の別フォルダを設定しなおした場合、先に作成したフォルダが残る場合があります。必要に応じて削除してください。



“フォルダの選択”画面について

“インストール先の選択”画面で[参照]ボタンをクリックすると、“フォルダの選択”画面が表示されます。

“フォルダの選択”画面を表示中にカーソルを他の画面に移動し、再度“フォルダの選択”画面にカーソルを戻した時、“フォルダの選択”画面からカーソルが消える場合があります。

“フォルダの選択”画面を表示中は、他の画面にカーソルを移動させないでください。

カーソルが消える現象が発生した場合、“フォルダの選択”画面にカーソルを戻した状態で[キャンセル]ボタンをクリックし、一旦“インストール先の選択”画面に戻してから、再度、[参照]ボタンをクリックして“フォルダの選択”画面を表示しなおしてください。

3. “ファイル コピーの開始”画面で、入力内容の確認を行い、内容に誤りがなければ、[次へ]ボタンをクリックしてください。インストールが開始されます。



インストール中断

インストール中に[キャンセル]ボタンをクリックして中断した場合、インストールフォルダが残る場合があります。必要に応じて削除してください。

4. インストール完了後、[完了]ボタンをクリックして終了してください。

D.3 注意事項

Java監視機能をインストール場合、以下の点に注意してください。

- Java監視機能のインストールは、コンピュータの管理者もしくはAdministratorsグループのメンバーで行ってください。
- インストールを行う前にすべてのアプリケーションを終了させてください。

Java監視機能をインストールする際に、Java監視機能が利用するディスク、レジストリ等の資源を使用しているとインストール作業に失敗する場合があります(例: イベントビューア、エクスプローラ、レジストリエディタ等)。

- Java監視機能が既にインストールしてある状態で、本インストーラを実行した場合は、実際のインストールは行わず、インストール完了画面が表示されます。